

Oracle® Database

Client インストレーション・ガイド

10g リリース 1 (10.1.0.2.0) for Microsoft Windows

部品番号 : B13751-02

2004 年 10 月

Oracle Database Client インストレーション・ガイド, 10g リリース 1 (10.1.0.2.0) for Microsoft Windows

部品番号 : B13751-02

原本名 : Oracle Database Client Installation Guide, 10g Release 1 (10.1.0.2.0) for Windows

原本部品番号 : B10131-02

原本著者 : Patricia Huey

原本協力者 : Punsri Abeywickrema, Phil Choi, Toby Close, Alex Keh, Mark Kennedy, Peter LaQuerre, Anu Natarajan, Bharat Paliwal, Sham Rao Pavan, Helen Slattery, Debbie Steiner, Linus Tanaka, Sujatha Tolstoy, Alice Watson, Janelle Simmons

Copyright © 1996, 2004 Oracle Corporation. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとし、著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation, and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかるとして使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle は Oracle Corporation およびその関連会社の登録商標です。その他の名称は、Oracle Corporation または各社が所有する商標または登録商標です。

目次

はじめに	v
対象読者	vi
このマニュアルの構成	vi
関連ドキュメント	vii
表記規則	viii
 1 Oracle Database Client インストールの概要	
インストールの概要	1-2
Oracle Database Client のインストール・タイプ	1-3
 2 Oracle Database Client のインストール前の要件	
Oracle Database Client のハードウェア要件	2-2
ハード・ディスク領域の要件	2-2
Oracle Database Client のソフトウェア要件	2-3
Oracle Database Client のハードウェアおよびソフトウェア要件	2-5
Windows Telnet サービスのサポート	2-5
Windows ターミナル サービスおよびリモート デスクトップのサポート	2-6
Windows XP のサポート	2-6
Microsoft 管理コンソール用 Oracle スナップインの要件	2-7
 3 Oracle Database Client のインストール	
Oracle Database Client のインストール前の考慮事項	3-2
複数の Oracle Database Client インストールの実行	3-2
Oracle ベース・ディレクトリの作成	3-2

複数の Oracle ホームへの Oracle Database Client のインストール	3-3
既存の Oracle 製品がインストールされているシステムへのインストール	3-3
インストール・ソフトウェアへのアクセス	3-4
リモートの CD-ROM ドライブまたは DVD ドライブからのインストール	3-4
リモート・コンピュータでの CD-ROM ドライブまたは DVD ドライブの共有	3-4
ローカル・コンピュータでの CD-ROM ドライブまたは DVD ドライブのマッピング	3-5
リモート・アクセス・ソフトウェアを介したリモート・コンピュータへのインストール	3-6
ハード・ドライブからのインストール	3-6
リモートの CD-ROM ドライブまたは DVD ドライブからのインストール	3-7
Oracle Technology Network Japan の Web サイトからの Oracle ソフトウェアのダウンロード	3-7
ハード・ディスクへの Oracle Database Client ソフトウェアのコピー	3-8
Oracle Database Client ソフトウェアのインストール	3-8
Oracle Database Client のインストールのガイドライン	3-8
Oracle Database Client のインストールの手順	3-9

4 Oracle Database Client のインストール後の作業

インストール後の必須作業	4-2
自動ストレージ管理と通信するための Oracle Database の構成	4-2
インストール後の推奨作業	4-2
Oracle データベースへの Oracle Database Client の接続	4-2
Oracle データベースへの Instant Client の接続	4-3
直接アドレッシングを使用した接続の指定	4-3
tnsnames.ora ファイルの構成による接続の指定	4-4
空の接続文字列および LOCAL 変数を使用した接続の指定	4-5
ユーザー・アカウントの設定	4-6
Oracle Enterprise Manager Java Console の起動	4-6
Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) における Oracle9i の言語および定義ファイルの使用 方法	4-7
製品固有のインストール後の必須作業 - Oracle Net Services の構成	4-8

5 Oracle Database Client ソフトウェアの削除

Windows での Oracle サービスの停止	5-2
Oracle Universal Installer を使用した Oracle Database Client の削除	5-2
Oracle Universal Installer を使用して Oracle Database Client を削除する際のガイドライン	5-3
Oracle Universal Installer を使用して Oracle Database Client を削除する際の手順	5-3

残りの Oracle Database Client コンポーネントの手動による削除方法	5-5
Windows におけるレジストリ エディタからの Oracle キーの削除	5-6
Oracle Net Services レジストリ・キーのみの削除	5-6
すべての Oracle レジストリ・キーの削除	5-7
PATH 環境変数のパスの更新	5-8
「スタート」メニューからの Oracle Database Client の削除	5-8
Oracle Database Client ディレクトリの削除	5-9

A Oracle Database Client 拡張インストール

非対話モードでの Oracle コンポーネントのインストール	A-2
レスポンス・ファイルを使用した非対話モードでの Oracle コンポーネントのインストール 方法	A-3
サンプル・レスポンス・ファイルのカスタマイズ	A-3
新規レスポンス・ファイルの作成	A-4
Oracle Universal Installer の実行およびレスポンス・ファイルの指定	A-5
異なる言語の Oracle コンポーネント	A-6
異なる言語での Oracle Universal Installer の実行	A-6
異なる言語での Oracle コンポーネントの使用	A-7

B Oracle Database Client グローバリゼーション・サポート

NLS_LANG パラメータ	B-2
一般に使用される NLS_LANG の値	B-3
MS-DOS モードおよびバッチ・モードでの NLS_LANG 設定	B-5

C Oracle Database Client のインストールのトラブルシューティング

要件の確認	C-2
インストール・エラーが発生した場合の操作	C-2
インストール・セッションのログの確認	C-2
Configuration Assistant のトラブルシューティング	C-3
Configuration Assistant の障害	C-3
致命的エラー	C-4
非対話型インストールでのレスポンス・ファイルのエラー処理	C-4
インストール失敗後のクリーン・アップ	C-4

用語集

索引

はじめに

このマニュアルでは、Oracle Database Client for 32-bit Windows のインストールおよび構成の手順について説明します。このマニュアルでは、Windows NT、Windows 2000、Windows XP および Windows Server 2003 オペレーティング・システムにインストールされる Oracle Database Client for Windows ソフトウェアの機能についてのみ説明します。

項目は次のとおりです。

- [対象読者](#)
- [このマニュアルの構成](#)
- [関連ドキュメント](#)
- [表記規則](#)

対象読者

『Oracle Database Client インストール・ガイド』は、Oracle Database Client をインストールするユーザーを対象としています。

このマニュアルを使用するには、次の点が必要です。

- サポートされている Microsoft Windows オペレーティング・システムが、コンピュータにインストールされ、テスト済であること
- Oracle Database Client をインストールするコンピュータでの管理権限
- オブジェクト・リレーショナル・データベース管理の概念に精通していること

このマニュアルの構成

このマニュアルの構成は、次のとおりです。

第 1 章「Oracle Database Client インストールの概要」

実行可能な Oracle Database Client の異なるインストール・タイプと、ソフトウェアのインストール前に考慮する必要のある問題について説明します。

第 2 章「Oracle Database Client のインストール前の要件」

Oracle Universal Installer を起動する前に完了しておく必要がある作業について説明します。

第 3 章「Oracle Database Client のインストール」

Oracle Universal Installer を使用してインストール・メディアまたはハード・ディスクから Oracle Database Client をインストールする方法について説明します。

第 4 章「Oracle Database Client のインストール後の作業」

ソフトウェアのインストール後にインストール後の作業を完了する方法について説明します。

第 5 章「Oracle Database Client ソフトウェアの削除」

Oracle ホーム・ディレクトリからすべての Oracle データベース、インスタンスおよびソフトウェアを完全に削除する方法について説明します。

付録 A「Oracle Database Client 拡張インストール」

非対話モードまたは外国語での Oracle Universal Installer の実行方法について説明します。

付録 B「Oracle Database Client グローバリゼーション・サポート」

グローバリゼーション・サポートについて説明します。

付録 C 「Oracle Database Client のインストールのトラブルシューティング」

トラブルシューティングについて説明します。

用語集

関連ドキュメント

詳細は、次の Oracle ドキュメントを参照してください。

- 『Oracle Database インストレーション・ガイド』
- 『Oracle Database Client リリース・ノート』
- 『Oracle Workflow for Oracle Database インストレーション・ノート』
- 『Oracle Enterprise Manager Grid Control 基本インストレーションおよび構成』
- 『Oracle Database アップグレード・ガイド』
- 『Oracle Database プラットフォーム・ガイド』
- 『Oracle Database 2 日でデータベース管理者』

このマニュアル内の多くの例では、Oracle のインストール時にデフォルトでインストールされるシード・データベースのサンプル・スキーマを使用しています。これらのスキーマの作成方法およびその使用方法の詳細は、『Oracle Database サンプル・スキーマ』を参照してください。

リリース・ノート、インストール関連ドキュメント、ホワイト・ペーパーまたはその他の関連ドキュメントは、OTN-J (Oracle Technology Network Japan) から、無償でダウンロードできます。OTN-J を使用するには、オンラインでの登録が必要です。登録は、次の Web サイトから無償で行えます。

<http://otn.oracle.co.jp/membership/>

すでに OTN-J のユーザー名およびパスワードを取得している場合は、次の URL で OTN-J Web サイトのドキュメントのセクションに直接接続できます。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

表記規則

この項では、このマニュアルの本文およびコード例で使用される表記規則について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [本文の表記規則](#)
- [コード例の表記規則](#)
- [Microsoft Windows オペレーティング・システム環境での表記規則](#)

本文の表記規則

本文では、特定の項目が一目でわかるように、次の表記規則を使用します。次の表に、その規則と使用例を示します。

規則	意味	例
太字	太字は、本文中で定義されている用語および用語集に記載されている用語を示します。	この句を指定すると、 索引構成表 が作成されます。
固定幅フォントの大文字	固定幅フォントの大文字は、システム指定の要素を示します。このような要素には、パラメータ、権限、データ型、Recovery Manager キーワード、SQL キーワード、SQL*Plus またはユーティリティ・コマンド、パッケージおよびメソッドがあります。また、システム指定の列名、データベース・オブジェクト、データベース構造、ユーザー名およびロールも含まれます。	NUMBER 列に対してのみ、この句を指定できます。 BACKUP コマンドを使用して、データベースのバックアップを作成できます。 USER_TABLES データ・ディクショナリ・ビュー内の TABLE_NAME 列を問い合わせます。 DBMS_STATS.GENERATE_STATS プロシージャを使用します。

規則	意味	例
固定幅フォントの小文字	固定幅フォントの小文字は、実行可能ファイル、ファイル名、ディレクトリ名およびユーザーが指定する要素のサンプルを示します。このような要素には、コンピュータ名およびデータベース名、ネット・サービス名および接続識別子があります。また、ユーザーが指定するデータベース・オブジェクトとデータベース構造、列名、パッケージとクラス、ユーザー名とロール、プログラム・ユニットおよびパラメータ値も含まれます。 注意: プログラム要素には、大文字と小文字を組み合わせるものもあります。これらの要素は、記載されているとおりに入力してください。	sqlplus と入力して、SQL*Plus をオープンします。 パスワードは、orapwd ファイルで指定します。 /disk1/oracle/dbs ディレクトリ内のデータ・ファイルおよび制御ファイルのバックアップを作成します。 hr.departments 表には、department_id、department_name および location_id 列があります。 QUERY_REWRITE_ENABLED 初期化パラメータを true に設定します。 oe ユーザーとして接続します。 JRepUtil クラスが次のメソッドを実装します。
固定幅フォントの小文字のイタリック	固定幅フォントの小文字のイタリックは、プレースホルダまたは変数を示します。	parallel_clause を指定できます。 Uold_release.SQL を実行します。ここで、old_release とはアップグレード前にインストールしたリリースを示します。

コード例の表記規則

コード例は、SQL、PL/SQL、SQL*Plus または他のコマンドライン文の例です。次のように固定幅フォントで表示され、通常のテキストと区別されます。

```
SELECT username FROM dba_users WHERE username = 'MIGRATE';
```

次の表に、コード例で使用される表記規則とその使用例を示します。

規則	意味	例
[]	大カッコは、カッコ内の項目を任意に選択することを表します。大カッコは、入力しないでください。	DECIMAL (<i>digits</i> [, <i>precision</i>])
{ }	中カッコは、カッコ内の項目のうち、1 つが必須であることを表します。中カッコは、入力しないでください。	{ENABLE DISABLE}

規則	意味	例
	縦線は、大カッコまたは中カッコ内の複数の選択項目の区切りに使用します。項目のうちの1つを入力します。縦線は、入力しないでください。	{ENABLE DISABLE} [COMPRESS NOCOMPRESS]
...	水平の省略記号は、次のいずれかを示します。 ■ 例に直接関連しないコードの一部が省略されている。 ■ コードの一部を繰り返すことができる。	CREATE TABLE ... AS subquery; SELECT col1, col2, ... , coln FROM employees;
.	垂直の省略記号は、例に直接関連しない複数の行が省略されていることを示します。	SQL> SELECT NAME FROM V\$DATAFILE; NAME ----- /fs1/dbs/tbs_01.dbf /fs1/dbs/tbs_02.dbf . . . /fs1/dbs/tbs_09.dbf 9 rows selected.
その他の記号	大カッコ、中カッコ、縦線および省略記号以外の記号は、記載されているとおりに入力する必要があります。	acctbal NUMBER(11,2); acct CONSTANT NUMBER(4) := 3;
イタリック体	イタリック体は、特定の値を指定する必要があるプレースホルダや変数を示します。	CONNECT SYSTEM/system_password DB_NAME = database_name
大文字	大文字は、システム指定の要素を示します。これらの要素は、ユーザー定義の要素と区別するために大文字で示されます。大カッコ内にないかぎり、表示されているとおりの順序および綴りで入力します。ただし、大 / 小文字が区別されないため、小文字でも入力できます。	SELECT last_name, employee_id FROM employees; SELECT * FROM USER_TABLES; DROP TABLE hr.employees;
小文字	小文字は、ユーザー指定のプログラム要素を示します。たとえば、表名、列名またはファイル名などです。 注意: プログラム要素には、大文字と小文字を組み合わせるものもあります。これらの要素は、記載されているとおりに入力してください。	SELECT last_name, employee_id FROM employees; sqlplus hr/hr CREATE USER mjones IDENTIFIED BY ty3MU9;

Microsoft Windows オペレーティング・システム環境での表記規則

次の表に、Microsoft Windows オペレーティング・システム環境での表記規則とその使用例を示します。

規則	意味	例
ファイル名およびディレクトリ名	ファイル名およびディレクトリ名は大 / 小文字が区別されません。特殊文字の左山カッコ (<)、右山カッコ (>)、コロン (:)、二重引用符 (")、スラッシュ (/)、縦線 () およびハイフン (-) は使用できません。円記号 (¥) は、引用符で囲まれている場合でも、要素のセパレータとして処理されます。Windows では、ファイル名が ¥¥ で始まる場合、汎用命名規則が使用されていると解釈されます。	c:¥winnt"¥"system32 は C:¥WINNT¥SYSTEM32 と同じです。
Windows コマンド・ プロンプト	Windows コマンド・プロンプトには、カレント・ディレクトリが表示されます。このマニュアルでは、コマンド・プロンプトと呼びます。コマンド・プロンプトのエスケープ文字はカレット (^) です。	C:¥oracle¥oradata>
特殊文字	Windows コマンド・プロンプトで二重引用符 (") のエスケープ文字として円記号 (¥) が必要な場合があります。丸カッコおよび一重引用符 (') にはエスケープ文字は必要ありません。エスケープ文字および特殊文字の詳細は、Windows オペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。	C:¥>exp scott/tiger TABLES=emp QUERY=¥"WHERE job='SALESMAN' and sal<1600¥" C:¥>imp SYSTEM/password FROMUSER=scott TABLES=(emp, dept)
HOME_NAME	Oracle ホームの名前を表します。ホーム名には、英数字で 16 文字まで使用できます。ホーム名に使用可能な特殊文字は、アンダースコアのみです。	C:¥> net start OracleHOME_NAME_TNSListener

規則	意味	例
ORACLE_HOME および ORACLE_BASE	Oracle8i より前のリリースでは、Oracle コンポーネントをインストールすると、すべてのサブディレクトリが最上位の ORACLE_HOME の直下に置かれました。ORACLE_HOME ディレクトリの名前は、Windows NT の場合はデフォルトでは C:\orant です。 このリリースは、Optimal Flexible Architecture (OFA) のガイドラインに準拠しています。ORACLE_HOME ディレクトリ下に配置されないサブディレクトリもあります。最上位のディレクトリは ORACLE_BASE と呼ばれ、デフォルトでは C:\oracle\product\10.1.0 です。他の Oracle ソフトウェアがインストールされていないコンピュータに最新リリースの Oracle をインストールした場合、Oracle ホーム・ディレクトリは、デフォルトで C:\oracle\product\10.1.0\db_n に設定されます。n は最新の Oracle ホーム番号です。Oracle ホーム・ディレクトリは、ORACLE_BASE の直下に配置されます。 このマニュアルに示すディレクトリ・パスの例は、すべて OFA の表記規則に準拠しています。	%ORACLE_HOME%\rdbms\admin ディレクトリへ移動します。

Oracle Database Client インストールの概要

この章では、実行可能な Oracle Database Client の異なるインストール・タイプと、ソフトウェアのインストール前に考慮する必要がある問題について説明します。

この章の項目は次のとおりです。

- [インストールの概要](#)
- [Oracle Database Client のインストール・タイプ](#)

インストールの概要

Oracle Database Client のインストール・プロセスは、次の 4 段階で構成されます。

1. **インストールの計画** : この概要の章では、Oracle Database Client のインストールに使用できるインストール・タイプと、開始前に考慮が必要な問題について説明します。
2. **インストール前の作業の完了** : 第 2 章では、Oracle Database Client をインストールする前に完了する必要があるインストール前の作業について説明します。
3. **ソフトウェアのインストール** : Oracle Database Client をインストールするには、次の章を使用します。
 - 第 3 章では、Oracle Universal Installer (OUI) を使用して Oracle Database Client をインストールする方法について説明します。
 - 付録 A では、拡張インストール、すなわち複数の Oracle Database Client インストールを実行する必要がある場合に使用する非対話型（サイレント）インストールの実行について説明します。この付録では、異なる言語を使用した Oracle コンポーネントのインストールおよび使用方法についても説明します。
 - 付録 C には、インストール時に問題が発生した場合のトラブルシューティング・アドバイスが記載されています。
 - 第 5 章では、Oracle Database Client の削除方法を説明します。
4. **インストール後の作業の完了** : インストール後の作業を完了するには、次の章を使用します。
 - 第 4 章では、インストール後の推奨作業および必須作業について説明します。
 - 付録 B では、グローバリゼーション・サポートについて説明します。

Oracle Database Client のインストール・タイプ

Oracle Database Client のインストール時には、次のインストール・タイプのいずれかを選択できます。

- **管理者**：アプリケーションでローカル・システムまたはリモート・システムの Oracle データベースに接続できます。Oracle データベースの管理に使用するツールを提供します。
- **ランタイム**：アプリケーションでローカル・システムまたはリモート・システムの Oracle データベースに接続できます。
- **カスタム**：「管理者」および「ランタイム」コンポーネントのリストから個別のコンポーネントを選択できます。
- **InstantClient**：Instant Client 機能を使用する Oracle Call Interface アプリケーションに必要な共有ライブラリのみをインストールします。このインストール・タイプは、他の Oracle Database Client インストール・タイプよりディスク領域が少なくてすみます。

関連資料：Instant Client 機能の詳細は、『Oracle Call Interface プログラマーズ・ガイド』を参照してください。

Oracle Database Client のインストール前の要件

この章では、Oracle Universal Installer を起動する前に完了しておく必要がある作業について説明します。

この章の項目は次のとおりです。

- [Oracle Database Client のハードウェア要件](#)
- [Oracle Database Client のソフトウェア要件](#)
- [Oracle Database Client のハードウェアおよびソフトウェア要件](#)
- [Microsoft 管理コンソール用 Oracle スナップインの要件](#)

Oracle Database Client のハードウェア要件

Oracle Database Client には、次のハードウェア・コンポーネントが必須です。

- RAM: 128MB 以上、推奨 256MB
- 仮想メモリー: RAM の 2 倍
- ディスク領域: 表 2-1 を参照
- 一時ディスク領域: 100MB
- ビデオ・アダプタ: 256 色
- プロセッサ: 200MHz 以上

ハード・ディスク領域の要件

この項では、Windows NT File System (NTFS) ファイル・システムのシステム要件を示します。FAT32 領域要件はわずかに大きくなります。Oracle コンポーネントは、NTFS にインストールすることをお薦めします。

この項に記載されている NTFS システム要件は、Oracle Universal Installer の「サマリー」画面で報告されるハード・ディスク値よりも正確です。「サマリー」画面には、データベースの作成に必要な領域、またはハード・ドライブ上で展開される圧縮ファイルのサイズは表示されません。

Oracle Database Client コンポーネントのハード・ディスク要件には、Java Runtime Environment (JRE) と Oracle Universal Installer を、オペレーティング・システムがインストールされているパーティションにインストールするために必要な領域が含まれています。十分な領域がない場合は、インストールが失敗し、エラー・メッセージが表示されます。

表 2-1 に、NTFS の領域要件を示します。

表 2-1 NTFS のハード・ディスク領域要件

インストール・タイプ	システム・ドライブ	Oracle ホーム・ドライブ
管理者	80MB	485MB
ランタイム	70MB	240MB
InstantClient	70MB	88MB

関連資料: 『Oracle Database プラットフォーム・ガイド』の「NTFS ファイル・システムと Windows レジストリの権限」

システムがこれらの要件を満たしているかどうかを確認する手順は、次のとおりです。

- 1. 物理 RAM サイズを確認します。たとえば、Windows 2000 を使用するコンピュータの場合、コントロール パネルの「システム」を開き、「全般」タブを選択します。システムにインストールされている物理 RAM のサイズが必要サイズより小さい場合は、先に進む前にメモリーを増設する必要があります。
- 2. 構成済のスワップ領域のサイズ（ページング・ファイル・サイズ）を確認します。たとえば、Windows 2000 を使用するコンピュータの場合、コントロール パネルの「システム」を開き、「詳細」タブを選択し、「パフォーマンス オプション」をクリックします。
追加のスワップ領域を構成する方法は、必要に応じてオペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。
- 3. システムの空きディスク領域のサイズを確認します。たとえば、Windows 2000 を使用するコンピュータの場合、「マイ コンピュータ」を開き、Oracle ソフトウェアをインストールするドライブを右クリックし、「プロパティ」を選択します。
- 4. temp ディレクトリで使用可能なディスク領域のサイズを確認します。これは、空きディスク領域全体のサイズから、インストールされる Oracle ソフトウェアに必要なとなるサイズを引いた値に相当します。

temp ディレクトリで使用可能なディスク領域が 100MB 未満の場合は、まず不要なファイルをすべて削除します。それでも temp ディスク領域が 100MB 未満である場合は、TEMP または TMP 環境変数が別のハード・ドライブを指すように設定します。たとえば、Windows 2000 を使用するコンピュータの場合、コントロール パネルの「システム」を開き、「詳細」タブを選択し、「環境変数」をクリックします。

Oracle Database Client のソフトウェア要件

表 2-2 に、Oracle Database Client のソフトウェア要件を示します。

表 2-2 ソフトウェア要件

要件	説明
システム・アーキテクチャ	32 ビット

表 2-2 ソフトウェア要件（続き）

要件	説明
オペレーティング・システム	Oracle Database Client for Windows は、次のオペレーティング・システムでサポートされます。 ■ Windows NT Server 4.0、Windows NT Server Enterprise Edition 4.0、および Terminal Server Edition Service Pack 6a 以上がサポートされます。Windows NT Workstation は、サポートされなくなりました。 ■ Windows 2000 Service Pack1 以上。Terminal Services および Windows 2000 MultiLanguage Edition（MLE）を含む全エディションがサポートされます。 ■ Windows Server 2003。 ■ Windows XP Professional。 Windows Multilingual User Interface Pack は、Windows XP Professional および Windows Server 2003 でサポートされます。
コンパイラ	ACUCOBOL-GT for Pro*COBOL コンパイラ・バージョン 6.0.0 がサポートされます。 Pro*COBOL では Micro Focus Net Express コンパイラをサポートします。Object Oriented COBOL（OOCOBOL）の仕様はサポートされていません。 次のコンポーネントは、Microsoft Visual C++ 6.0 コンパイラ、Microsoft Visual C++ .NET 2002 コンパイラおよび Microsoft Visual C++ .NET 2003 コンパイラではサポートされていません。 ■ Oracle C++ Call Interface ■ Oracle Call Interface ■ 外部コールアウト ■ PL/SQL のネイティブ・コンパイル ■ XDK
ネットワーク・プロトコル	Oracle Database Document Library CD-ROM では、Oracle protocol support を使用して、次の業界標準ネットワーク・プロトコルと通信します。 ■ TCP/IP ■ SSL を使用する TCP/IP ■ Named Pipes

関連項目：

- 2-6 ページの「[Windows XP のサポート](#)」
- 2-5 ページの「[Windows Telnet サービスのサポート](#)」
- 2-6 ページの「[Windows ターミナル サービスおよびリモート デスクトップのサポート](#)」

Oracle Database Client のハードウェアおよびソフトウェア要件

このマニュアルに記載されているプラットフォーム固有のハードウェア要件とソフトウェア要件は、このマニュアルの発行時点での最新情報です。ただし、このマニュアルの発行後にプラットフォームおよびオペレーティング・システム・ソフトウェアの新バージョンが認定されている場合があるため、日本オラクル社のホームページを確認してください。次の URL で参照できます。

<http://www.oracle.co.jp/products/system/index.html>

以降の項では、次の要件を示します。

- [Windows Telnet サービスのサポート](#)
- [Windows ターミナル サービスおよびリモート デスクトップのサポート](#)
- [Windows XP のサポート](#)

Windows Telnet サービスのサポート

Windows XP、Windows 2000 および Windows Server 2003 には Telnet サービスが含まれており、これによってリモート・ユーザーは、オペレーティング・システムにログインし、コマンドラインを使用してコンソール・プログラムを実行できます。Oracle では、この機能を使用して、sqlplus、sqlldr、import および export などのデータベース・コマンドライン・ユーティリティがサポートされていますが、Oracle Universal Installer および Oracle Net Configuration Assistant などのデータベース GUI ツールはサポートされていません。

注意：コントロールパネルの「サービス」で Telnet サービスが開始されていることを確認します。

Windows ターミナル サービスおよびリモート デスクトップのサポート

Oracle では、Windows 2000 Server、Windows XP Professional および Windows Server 2003 のターミナル サービスを介した Oracle Database Client のインストール、構成および実行をサポートしています。Terminal Server を介したインストール時に問題が発生した場合、サーバーのターミナル サービス コンソール セッションに (mstsc/console を使用して) 接続することをお勧めします。

プラットフォーム固有のサポート情報は次のとおりです。

- **Windows 2000:** Oracle では、リモートのターミナル サービス クライアントからの Oracle Database Client のインストール、構成および実行をサポートしています。
- **Windows XP:** リモート デスクトップは、単一ユーザー ・ モードでのみ使用できます。
- **Windows Server 2003:** 管理モードまたは Terminal Server モードでリモート デスクトップのターミナル サービスを使用するように Windows Server 2003 を構成できます。

関連資料：

- Terminal Server の詳細は、次の URL の Microsoft のホームページを参照してください。

<http://www.microsoft.com/>

- 最新の Terminal Server に関連したシステム要件は、日本オラクル社のホームページを参照してください。

<http://www.oracle.co.jp/products/system/index.html>

Windows XP のサポート

次のコンポーネントは、Windows XP ではサポートされていません。

- DCE Adapter Support
- Entrust PKI Support
- Generic Connectivity
- nCipher Accelerator Support

Microsoft 管理コンソール用 Oracle スナップインの要件

Oracle Database には、Microsoft 管理コンソール (MMC) 用のいくつかのスナップインが付属しています。これらのスナップインには、バージョン 1.2 以上の MMC が必要です。

Oracle スナップインをインストールする前に、Internet Explorer バージョン 5.0 (IE 5.0) 以上をインストールします。IE 5.0 をインストールする前に Oracle スナップインをインストールした場合は、Oracle スナップインを再インストールします。

次のコンポーネントは、Oracle スナップイン・コンポーネントに依存します。

- Oracle Administration Assistant for Windows
- Oracle Counters for Windows Performance Monitor

注意： Oracle Administration Assistant for Windows をインストールすると、各 Oracle スナップイン・コンポーネントが自動的にインストールされます。

次の Web サイトから、Microsoft 管理コンソール (MMC) アドオンをダウンロードします。

<http://www.microsoft.com/>

Oracle Database Client のインストール

この章では、Oracle Database Client のインストール方法について説明します。

この章の項目は次のとおりです。

- [Oracle Database Client のインストール前の考慮事項](#)
- [インストール・ソフトウェアへのアクセス](#)
- [Oracle Database Client ソフトウェアのインストール](#)

Oracle Database Client のインストール前の考慮事項

インストールを開始する前に第 1 章「[Oracle Database Client インストールの概要](#)」の内容を確認し、第 2 章「[Oracle Database Client のインストール前の要件](#)」に記載されている作業を完了してください。

続いて、次の問題を検討します。

- [複数の Oracle Database Client インストールの実行](#)
- [Oracle ベース・ディレクトリの作成](#)
- [複数の Oracle ホームへの Oracle Database Client のインストール](#)
- [既存の Oracle 製品がインストールされているシステムへのインストール](#)

複数の Oracle Database Client インストールの実行

複数の Oracle Database Client インストールを実行する必要がある場合、非対話モードを使用します。非対話モードでは、各コンピュータで、レスポンス・ファイルを使用してコマンドラインから Oracle Universal Installer を実行します。レスポンス・ファイルは、通常 Oracle Universal Installer の GUI ダイアログ・ボックスに入力する設定を含むテキスト・ファイルです。この方法により、各コンピュータに対し類似した設定を使用して、複数インストールを簡単に実行できます。

関連項目： 非対話型インストールの実行方法については、A-2 ページの「[非対話モードでの Oracle コンポーネントのインストール](#)」を参照してください。

Oracle ベース・ディレクトリの作成

Oracle Database Client を他の Oracle ソフトウェアがインストールされていないコンピュータにインストールする場合、Oracle Universal Installer により Oracle ベース・ディレクトリが作成されます。Oracle ソフトウェアがすでにインストールされている場合は、1 つ以上の Oracle ベース・ディレクトリがすでに存在します。後者の場合、Oracle Universal Installer で Oracle Database Client をインストールする Oracle ベース・ディレクトリを選択できます。

インストール前に Oracle ベース・ディレクトリを作成する必要はありませんが、必要ならば作成することもできます。

注意： システムに他の Oracle ベース・ディレクトリが存在する場合にも、新規 Oracle ベース・ディレクトリを作成するように選択できます。

複数の Oracle ホームへの Oracle Database Client のインストール

Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) から、すべての Oracle コンポーネントを同じコンピュータ上の複数の Oracle ホームにインストールできます。ただし、一部のコンポーネントは、一度に 1 つのアクティブ・インスタンスしかサポートできません。つまり、現行（最新）のインストールは、前のインストールを非アクティブにします。これらのコンポーネントは次のとおりです。

- Oracle Administration Assistant for Windows
- Oracle Counters for Windows Performance Monitor
- Oracle Objects for OLE
- Oracle Provider for OLE DB

既存の Oracle 製品がインストールされているシステムへのインストール

Oracle Database Client は、新規の Oracle ホーム・ディレクトリにインストールする必要があります。コンピュータに他の Oracle ソフトウェアがインストールされているかどうかに関係なく、Oracle Universal Installer により、Oracle ホーム・ディレクトリを作成するように要求されます。Oracle Database Client のあるリリースから別のリリースの Oracle ホーム・ディレクトリには、製品をインストールできません。たとえば、既存の Oracle9i の Oracle ホーム・ディレクトリには Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) ソフトウェアをインストールできません。このリリースを以前の Oracle リリースのソフトウェアがインストールされている Oracle ホーム・ディレクトリにインストールしようとする、失敗します。

このリリースは、別の Oracle ホーム・ディレクトリにインストールするかぎり、同じシステムに複数回インストールできます。

インストール・ソフトウェアへのアクセス

Oracle Database Client ソフトウェアはコンパクト・ディスク（CD-ROM または DVD-ROM）で配布されますが、Oracle Technology Network Japan（OTN-J）の Web サイトからもダウンロードできます。次のシナリオを使用して、Oracle Database Client にアクセスしインストールできます。

- リモートの CD-ROM ドライブまたは DVD ドライブからのインストール
- リモート・アクセス・ソフトウェアを介したリモート・コンピュータへのインストール
- Oracle Technology Network Japan の Web サイトからの Oracle ソフトウェアのダウンロード
- ハード・ディスクへの Oracle Database Client ソフトウェアのコピー

リモートの CD-ROM ドライブまたは DVD ドライブからのインストール

Oracle Database Client をインストールするコンピュータに CD-ROM ドライブまたは DVD ドライブがない場合、リモートの CD-ROM ドライブまたは DVD ドライブからインストールを実行できます。次の手順を実行します。

- リモート・コンピュータでの CD-ROM ドライブまたは DVD ドライブの共有
- ローカル・コンピュータでの CD-ROM ドライブまたは DVD ドライブのマッピング

リモート・コンピュータでの CD-ROM ドライブまたは DVD ドライブの共有

使用するリモートの CD-ROM ドライブまたは DVD ドライブで共有アクセスを許可する必要があります。これを設定するには、CD-ROM ドライブまたは DVD ドライブのあるリモート・コンピュータで、次の手順を実行します。

1. Administrator ユーザーとしてリモート・コンピュータにログインします。
2. Windows のエクスプローラを起動します。
3. CD-ROM または DVD のドライブ文字を右クリックし、「共有」（Windows 2000、Windows NT）または「共有とセキュリティ」（Windows 2003、Windows XP）を選択します。
4. 「共有」タブをクリックし、次を実行します。
 - a. 「このフォルダを共有する」を選択します。
 - b. 「共有名」に、cdrom または dvd などの共有名を入力します。この名前は、ローカル・コンピュータで CD-ROM ドライブまたは DVD ドライブをマッピングするときに使用します。次の手順の、手順 1 の d を参照してください。

- c. 「アクセス許可」をクリックします。Oracle Database をインストールするためにドライブにアクセスするユーザーには、少なくとも「読み取り」アクセス許可が必要です。
 - d. 終了したら、「OK」をクリックします。
5. CD-ROM の場合、「Oracle Database 10g リリース 1 (10.1)」という CD を CD-ROM ドライブに挿入します。

DVD の場合、Oracle Database の DVD を DVD ドライブに挿入します。

ローカル・コンピュータでの CD-ROM ドライブまたは DVD ドライブのマッピング

リモートの CD-ROM ドライブまたは DVD ドライブをマッピングし、マッピングされたドライブから Oracle Universal Installer を実行するには、次の手順をローカル・コンピュータで実行します。

1. リモートの CD-ROM ドライブまたは DVD ドライブをマッピングします。
 - a. ローカル・コンピュータで Windows のエクスプローラを起動します。
 - b. 「ツール」メニューから「ネットワーク ドライブの割り当て」を選択し、「ネットワーク ドライブの割り当て」ダイアログを表示します。
 - c. リモートの CD-ROM ドライブまたは DVD ドライブのドライブ文字を選択します。
 - d. 「フォルダ」に、リモートの CD-ROM ドライブまたは DVD ドライブの場所を次の書式を使用して入力します。

¥¥remote_hostname¥share_name

要素の意味は次のとおりです。

- remote_hostname は、CD-ROM ドライブまたは DVD ドライブがあるリモート・コンピュータの名前です。
- share_name は、前述の手順の、手順 4 で入力した共有名です。たとえば、次のようになります。

¥¥computer2¥cdrom

- e. 別のユーザーとしてリモート・コンピュータに接続する必要がある場合、次のようにします。
 - Windows NT: 「ユーザー名」にユーザー名を入力します。
 - Windows 2000: 「異なるユーザー名」をクリックし、ユーザー名を入力します。
 - Windows 2003 または Windows XP: 「異なるユーザー名」をクリックし、ユーザー名を入力します。

- f. 「OK」(Windows NT) または「完了」(Windows 2000、Windows 2003、Windows XP) をクリックします。
2. マッピングされた CD-ROM ドライブまたは DVD ドライブから Oracle Universal Installer を実行します。
3. 3-8 ページの「[Oracle Database Client ソフトウェアのインストール](#)」に進んでください。

リモート・アクセス・ソフトウェアを介したリモート・コンピュータへのインストール

リモート・コンピュータに Oracle Database Client をインストールし実行しようとしている（つまり、リモート・コンピュータにハード・ドライブがあり、リモート・コンピュータで Oracle Database Client コンポーネントを実行する）が、そのコンピュータに物理的にアクセスできない場合、リモート・コンピュータで VNC や Symantec pcAnywhere などのリモート・アクセス・ソフトウェアを実行していれば、インストールを実行できます。ローカル・コンピュータでもリモート・アクセス・ソフトウェアを実行する必要があります。

次の 2 通りの方法のいずれかによって、リモート・コンピュータに Oracle Database Client をインストールできます。

- Oracle Database Client の CD-ROM または DVD のコンテンツをハード・ドライブにコピーした場合、ハード・ドライブからインストールできます。
- CD-ROM または DVD をローカル・コンピュータのドライブに挿入し、CD-ROM または DVD からインストールできます。

ハード・ドライブからのインストール

Oracle Database Client の CD-ROM または DVD のコンテンツをハード・ドライブにコピーした場合、ハード・ドライブからインストールできます。

完了する必要がある手順は、次のとおりです。

1. リモート・アクセス・ソフトウェアがリモート・コンピュータおよびローカル・コンピュータにインストールされており、実行中であることを確認します。
2. Oracle Database Client の CD-ROM または DVD のコンテンツが入っているハード・ドライブを共有します。
3. リモート・コンピュータで、ドライブ文字を共有ハード・ドライブにマッピングします。リモート・コンピュータでこれを実行するには、リモート・アクセス・ソフトウェアを使用します。
4. リモート・アクセス・ソフトウェアを介して、リモート・コンピュータで Oracle Universal Installer を実行します。共有ハード・ドライブから Oracle Universal Installer にアクセスします。

5. 3-8 ページの「[Oracle Database Client ソフトウェアのインストール](#)」に進んでください。

リモートの CD-ROM ドライブまたは DVD ドライブからのインストール

CD-ROM または DVD をローカル・コンピュータのドライブに挿入し、CD-ROM または DVD からインストールできます。

完了する必要がある手順は、次のとおりです。

1. リモート・アクセス・ソフトウェアがリモート・コンピュータおよびローカル・コンピュータにインストールされており、実行中であることを確認します。

2. ローカル・コンピュータで、CD-ROM ドライブまたは DVD ドライブを共有します。

リモート・コンピュータで、ドライブ文字を共有 CD-ROM ドライブまたは DVD ドライブにマッピングします。リモート・コンピュータでこれを実行するには、リモート・アクセス・ソフトウェアを使用します。

これらの手順は、3-4 ページの「[リモートの CD-ROM ドライブまたは DVD ドライブからのインストール](#)」に記載されています。

3. リモート・アクセス・ソフトウェアを介して、リモート・コンピュータで Oracle Universal Installer を実行します。共有 CD-ROM ドライブまたは DVD ドライブから Oracle Universal Installer にアクセスします。
4. 3-8 ページの「[Oracle Database Client ソフトウェアのインストール](#)」に進んでください。

Oracle Technology Network Japan の Web サイトからの Oracle ソフトウェアのダウンロード

インストール・ファイルは、Oracle Technology Network Japan (OTN-J) からダウンロードして、ハード・ディスク上で展開できます。

1. ブラウザを使用して、次の URL にある Oracle Technology Network Japan のソフトウェア・ダウンロード・ページにアクセスします。

`http://otn.oracle.co.jp/software/`

2. インストールする製品のそれぞれのダウンロード・ページにナビゲートします。
3. ダウンロード・ページで、各必須ファイルのサイズを合計して必要なディスク領域を確認します。ファイル・サイズは、ファイル名の隣に表示されます。
4. ファイルの格納および展開用に、十分な空き領域のあるファイル・システムを選択します。ほとんどの場合、使用可能なディスク領域には、全圧縮ファイルの合計サイズの 2 倍以上のサイズが必要です。

5. 選択したファイル・システム上で、インストール・ディレクトリを保持するために、OraDBClient10g などの親ディレクトリをインストールする製品ごとに作成します。
6. すべてのインストール・ファイルを、作成したディレクトリにダウンロードします。
7. ダウンロードしたファイルのサイズが、Oracle Technology Network Japan 上の対応するファイルと一致することを確認します。
8. 作成した各ディレクトリで、ファイルを展開します。

必須インストール・ファイルを展開したら、3-8 ページの「[Oracle Database Client ソフトウェアのインストール](#)」を参照してください。

ハード・ディスクへの Oracle Database Client ソフトウェアのコピー

メディアの内容をハード・ディスクにコピーする手順は、次のとおりです。

1. ハード・ドライブにインストール・ファイルのディレクトリを作成します。たとえば、次のようになります。

```
d:\¥install¥Disk1
```

2. インストール・メディアの内容を作成したディレクトリにコピーします。

必須インストール・ファイルをコピーしたら、3-8 ページの「[Oracle Database Client ソフトウェアのインストール](#)」を参照してください。

Oracle Database Client ソフトウェアのインストール

この項の項目は次のとおりです。

- [Oracle Database Client のインストールのガイドライン](#)
- [Oracle Database Client のインストールの手順](#)

Oracle Database Client のインストールのガイドライン

ほとんどの場合は、Oracle Universal Installer の Graphical User Interface (GUI) を使用して Oracle Database Client をインストールします。ただし、GUI を使用せずに Oracle Universal Installer を使用して非対話型のインストールを完了することもできます。この方法は、複数の Oracle Database Client インストールを実行する必要がある場合に特に役立ちます。

Oracle Database Client をインストールするときは、次のガイドラインに従います。

関連項目： 非対話型インストールおよびその他の拡張インストールについては、[付録 A 「Oracle Database Client 拡張インストール」](#) を参照してください。

- このリリースのコンポーネントをインストールする際に、旧リリースの Oracle 製品から Oracle Universal Installer を使用しないでください。
- サポートされているすべての Windows プラットフォームでは、Oracle Database Client のインストールに同じインストール・メディアを使用します。
- Oracle Database Client がすでにインストールされている Oracle ホーム・ディレクトリに Oracle ソフトウェアを再インストールする場合は、開始する前に、インストール済みのコンポーネントをすべて再インストールする必要があります。
- オラクル社カスタマ・サポート・センターで提供されているパッチを使用する場合を除き、Java Runtime Environment (JRE) を変更しないでください。Oracle Universal Installer により、オラクル社が提供するバージョンの JRE が自動的にインストールされます。Oracle Universal Installer およびいくつかの Oracle Assistant の実行には、このバージョンが必要です。
- インストール中にエラーが発生した場合は、「ヘルプ」をクリックするか、[付録 C 「Oracle Database Client のインストールのトラブルシューティング」](#)を参照してください。

Oracle Database Client のインストールの手順

Oracle Database Client をインストールする手順は、次のとおりです。

1. Administrators グループのメンバーとして、Oracle コンポーネントをインストールするコンピュータにログオンします。

プライマリ ドメイン コントローラ (PDC) またはバックアップ ドメイン コントローラ (BDC) にインストールする場合、Domain Administrators グループのメンバーとしてログオンします。
2. CD からインストールする場合、「Oracle Database Client 10g リリース 1 (10.1)」という CD を挿入するか、インストール・ファイルをダウンロードまたはコピーしたディレクトリにナビゲートします。

関連項目：3-4 ページの「インストール・ソフトウェアへのアクセス」

インストール・メディアからインストールする場合は、Autorun 画面が自動的に表示されます。Autorun 画面が表示されない場合は、次のようにします。

- a. 「スタート」メニューから「ファイル名を指定して実行」を選択します。
- b. 次のように入力します。

```
DRIVE_LETTER:\autorun\autorun.exe
```

Autorun 画面で**製品のインストール / 削除**を選択します。

ハード・ディスクからインストールする場合は、ダウンロードまたはコピーしたインストール・ファイル用に作成したディレクトリにある `setup.exe` をダブルクリックします。

3. 「ようこそ」画面で「次へ」をクリックします。
4. 「ファイルの場所の指定」画面で、次を実行します。
 - 「ソース」の下、インストールする製品を表すパスをデフォルト設定のままにしておきます。

ほとんどの場合、この設定を変更する必要はありません。変更する場合、「参照」をクリックしてインストール・ファイルを検索します。
 - 「インストール先」の下に、Oracle ホームの名前と場所を入力します。

既存の Oracle コンポーネントがインストールされているコンピュータにインストールする場合であっても、Oracle Database Client を新規の Oracle ホームにインストールします。

Oracle9i 以下のソフトウェアが入っている既存の Oracle ホームには、Oracle Database Client 10g リリース 1 (10.1) ソフトウェアをインストールしないでください。
5. 「次へ」をクリックします。
6. 「インストール・タイプの選択」画面で、インストール・タイプを「InstantClient」、「管理者」、「ランタイム」または「カスタム」から選択し、「次へ」をクリックします。

関連項目：インストール・タイプの詳細は、1-3 ページの「[Oracle Database Client のインストール・タイプ](#)」を参照してください。

7. 「カスタム」を選択した場合、「使用可能な製品コンポーネント」画面でインストールするコンポーネントを選択し、「次へ」または「インストール」をクリックします。
8. 「サマリー」画面でインストールされたコンポーネントのリストをチェックし、「インストール」をクリックします。
9. 選択したインストール・タイプによっては、Oracle データベースと接続するように Oracle Database Client を構成します。
 - **InstantClient:** 手順 11 に進んでください。インストール完了後、4-3 ページの「[Oracle データベースへの Instant Client の接続](#)」に記載されている説明に従います。
 - **管理者またはカスタム:** 手順 10 に進んでください。
 - **ランタイム:** Oracle Universal Installer により、インストールで[簡易接続ネーミング・メソッド](#)が使用可能であると判断された場合、「次へ」をクリックして「終了」をクリックします。あるいは、インストール完了後、4-2 ページの「[Oracle データ](#)

ベースへの [Oracle Database Client の接続](#)」に記載されている説明に従ってデータベース接続を再構成できます。

10. 「管理者」または「カスタム」インストール・タイプの場合、[ネーミング・メソッド](#)または[標準構成](#)を選択して Oracle Database Client を Oracle データベースに接続できます。

「ネーミング・メソッド構成」を選択した場合、エンド・ユーザーにデータベース・サービスへの接続を許可するようにネーミング・メソッドを構成できます。「標準構成」を選択した場合、Oracle Net Configuration Assistant (NetCA) によってデフォルト構成が完了されます。(必要に応じていつでも、接続を後から再構成できます。)

標準構成の実行を選択しない場合、次の手順に従います。

- a. 「ようこそ」画面で「ローカル・ネット・サービス名構成」を選択し、「次へ」をクリックします。
- b. ネーミング・メソッドの選択画面で適切なネーミング・メソッドを選択し、「次へ」をクリックします。
- c. 「サービス名」画面で接続する Oracle データベースの名前を入力し、「次へ」をクリックします。
- d. プロトコルの選択画面で使用するプロトコルを選択し、「次へ」をクリックします。
- e. 選択したプロトコルによっては、「プロトコル」画面で適切な情報を入力し、「次へ」をクリックします。
- f. 「テスト」画面で接続をテストするかどうかを選択し、「次へ」をクリックします。
- g. 「ネット・サービス名」画面でネット・サービスの名前を入力し、「次へ」をクリックします。
- h. 他のネット・サービス名の構成に関する、残りの質問に回答し、「終了」をクリックして構成を完了します。

関連資料： Oracle Net Configuration Assistant の詳細は、『Oracle Net Services 管理者ガイド』を参照してください。

11. インストールの終了画面で「終了」をクリックし、「はい」をクリックして Oracle Universal Installer を終了します。
12. オプションで、インストール・プロセス中に作成された一時ファイルを削除する場合は、`¥temp¥OraInstalldate_time` ディレクトリを削除します。
OraInstalldate_time ディレクトリには、約 45MB のファイルが保持されます。
コンピュータを再起動しても、OraInstalldate_time ディレクトリは削除されます。
13. 第 4 章「[Oracle Database Client のインストール後の作業](#)」に進んで、インストール後の作業を完了します。

Oracle Database Client のインストール後の作業

この章では、ソフトウェアのインストール後にインストール後の作業を完了する方法について説明します。

この章の項目は次のとおりです。

- [インストール後の必須作業](#)
- [インストール後の推奨作業](#)
- [製品固有のインストール後の必須作業 - Oracle Net Services の構成](#)

注意： この章では、基本的な構成のみを説明します。より高度な構成およびチューニングの情報は、『Oracle Database プラットフォーム・ガイド』および製品固有の管理およびチューニングのガイドを参照してください。

インストール後の必須作業

インストールの完了後、次の項で説明する作業を実行する必要があります。

- [自動ストレージ管理と通信するための Oracle Database の構成](#)

自動ストレージ管理と通信するための Oracle Database の構成

自動ストレージ管理を使用する Oracle Database の Windows でのインストールでは、クライアントごとに Windows 固有の認証を有効にする必要があります。これを実行するには、[sqlnet.ora ファイル](#)（デフォルトの場所は %ORACLE_HOME%\network\admin）をチェックして、NTS が有効になっていることを確認します。たとえば、次のようになります。

```
sqlnet.authentication_services=(NTS)
```

関連資料： Windows 固有の認証の詳細は、『Oracle Database プラットフォーム・ガイド』を参照してください。

インストール後の推奨作業

インストールの完了後、次の項で説明する作業を実行することをお薦めします。

- [Oracle データベースへの Oracle Database Client の接続](#)
- [Oracle データベースへの Instant Client の接続](#)
- [ユーザー・アカウントの設定](#)
- [Oracle Enterprise Manager Java Console の起動](#)
- [Oracle Database 10g リリース 1 \(10.1\) における Oracle9i の言語および定義ファイルの使用方法](#)

Oracle データベースへの Oracle Database Client の接続

Oracle Universal Installer を実行して Oracle Database Client をインストールする場合、標準構成を完了する Net Configuration Assistant を起動するオプションが表示されます。これにより、Oracle データベースに接続するように Oracle Database Client を構成できます。このツールを実行しないことを選択し、実行すると後で決定した場合、次の手順を使用して Oracle Database Client を構成します。

1. 「スタート」メニューから、「Oracle - HOME_NAME」→「Configuration and Migration Tools」→「Oracle Net Configuration Assistant」を選択します。
2. 「ようこそ」画面で「ローカル・ネット・サービス名構成」を選択し、「次へ」をクリックします。
3. 「ネット・サービス名の構成」画面で「追加」を選択し、「次へ」をクリックします。

4. 「サービス名」画面で接続する Oracle データベースの名前を入力し、「次へ」をクリックします。
5. プロトコルの選択画面で使用するプロトコルを選択し、「次へ」をクリックします。
6. 選択したプロトコルによっては、「プロトコル」画面で適切な情報を入力し、「次へ」をクリックします。
7. 「テスト」画面で接続をテストするかどうかを選択し、「次へ」をクリックします。
8. 「ネット・サービス名」画面でネット・サービスの名前を入力し、「次へ」をクリックします。
9. 他のネット・サービス名の構成に関する、残りの質問に回答し、「終了」をクリックして構成を完了します。

関連資料： Oracle Net Configuration Assistant の詳細は、『Oracle Net Services 管理者ガイド』を参照してください。

Oracle データベースへの Instant Client の接続

Instant Client を Oracle データベースに接続する前に、Instant Client ライブラリを含むディレクトリが PATH 環境変数で指定されていることを確認します。デフォルトでは、インストール・プロセス中に Oracle Universal Installer によって PATH 変数が更新されます。このディレクトリは、インストール中に指定した次のような Oracle ホーム・ディレクトリになります。

```
C:\oracle\products\10.1.0\client_1
```

PATH 環境変数の確認後、次の方法のいずれかを使用して、クライアント・アプリケーションの Oracle Database 接続情報を指定できます。

- [直接アドレッシングを使用した接続の指定](#)
- [tnsnames.ora ファイルの構成による接続の指定](#)
- [空の接続文字列および LOCAL 変数を使用した接続の指定](#)

直接アドレッシングを使用した接続の指定

Instant Client 用に tnsnames の設定を構成せずに、クライアント・アプリケーションから Oracle Database への接続アドレスを直接指定できます。この方法は、tnsnames.ora ファイルを作成および管理する必要がないため簡単です。しかし、アプリケーション・ユーザーは、アプリケーションにログインするときにホスト名およびポート番号を指定する必要があります。

たとえば、クライアント・マシンで SQL*Plus を実行しており、ホスト名が shobeen、ポート番号が 1521 のデータベース・サーバーにある sales_us データベースへ接続するとします。SQL*Plus をコマンドラインから起動した場合、次のようにしてログインできます。

```
Enter user-name: system@admin@//shobeen:1521/sales_us
```

同様に、アプリケーション・コードで、Oracle Call Interface の Net ネーミング・メソッドを使用して Instant Client から Oracle Database への接続を作成できます。たとえば、OCI ServerAttach() コール内の次の書式によって、接続情報が指定されます。

- 次の形式を使用して SQL 接続 URL 文字列を指定します。

```
//host:port/service_name
```

たとえば、次のようになります。

```
//shobeen:1521/sales_us
```

- あるいは、Oracle Net のキーワード値ペアとして SQL 接続情報を指定できます。たとえば、次のようになります。

```
"(DESCRIPTION=(ADDRESS=(PROTOCOL=TCP) (HOST=shobeen) (PORT=1521))
(CONNECT_DATA=(SERVICE_NAME=sales_us)))"
```

関連資料：Oracle Call Interface Instant Client の使用方法の詳細は、『Oracle Call Interface プログラマーズ・ガイド』を参照してください。

tnsnames.ora ファイルの構成による接続の指定

デフォルトでは、Instant Client をインストールする際、Oracle Universal Installer には、サンプル tnsnames.ora ファイルや、その作成に通常使用する Oracle Net Configuration Assistant ユーティリティが含まれません。しかし、ユーザーが実際のホスト名およびポート番号を指定する必要をなくすには、Instant Client から Oracle Database への接続の設定に tnsnames.ora ファイルを使用することを検討します。

他の Oracle インストールから tnsnames.ora ファイルのバージョンをコピーおよび変更することにより、このファイルを手動で作成できます。または、Oracle Net Configuration Assistant を使用すれば、このファイルが自動的に作成および管理されます。

Oracle Net Configuration Assistant をインストールする手順は、次のとおりです。

1. Oracle Universal Installer を実行します。
2. 「カスタム」インストール・タイプを選択します。
3. 「使用可能な製品コンポーネント」リストから **Oracle Network Utilities** を選択し、「次へ」をクリックします。
4. 「サマリー」画面で「インストール」をクリックし、「終了」および「はい」をクリックして Oracle Universal Installer を終了します。

Oracle Net Configuration Assistant をインストールしたら、クライアント・コンピュータごとに 4-2 ページの「[Oracle データベースへの Oracle Database Client の接続](#)」に記載されている手順に従います。

次に、クライアント・コンピュータごとに、次の設定のいずれかを構成します。

- TNS_ADMIN 環境変数を設定して tnsnames.ora ファイルの場所を指定し、そのファイルからサービス名を指定します。
- tnsnames.ora ファイルを %ORACLE_HOME%\network\admin ディレクトリ内に配置し、ORACLE_HOME 環境がこの Oracle ホームに対して設定されていることを確認します。

関連資料： Oracle Call Interface Instant Client の接続文字列の詳細は、『Oracle Call Interface プログラマーズ・ガイド』を参照してください。

空の接続文字列および LOCAL 変数を使用した接続の指定

接続文字列を空の接続文字列 ("") に設定し、LOCAL 環境変数を次の値のいずれかに設定できます。

- 4-3 ページの「[直接アドレッシングを使用した接続の指定](#)」で説明されている直接アドレス。
- Oracle Net のキーワード値ペア。
- tnsnames.ora エントリおよび TNS_ADMIN は、tnsnames.ora のある場所に設定されます。
- tnsnames.ora エントリおよび次の項目。
 - %ORACLE_HOME%\network\admin にある tnsnames.ora ファイル
 - この Oracle ホームに設定されている ORACLE_HOME 環境変数

この方法により、アプリケーション・コード自体が空の接続文字列を使用する場合は、アプリケーションによって接続文字列を内部的に指定できます。空の接続文字列を使用するメリットは、アプリケーション自体で tnsnames.ora エントリを指定する必要がないことです。かわりに、ユーザーがアプリケーションを呼び出す際、LOCAL 環境変数の設定によって、スクリプトまたは環境を使用してデータベースの場所が決定されます。空の接続文字列を使用するデメリットは、アプリケーションがデータベースに接続できるようにするために、この追加情報を構成する必要があることです。

ユーザー・アカウントの設定

追加のユーザー・アカウントの設定の情報は、『Oracle Database プラットフォーム・ガイド』を参照してください。

Oracle Enterprise Manager Java Console の起動

Oracle Enterprise Manager Database Control または Grid Control を使用する他に、このリリースまたは以前のリリースからデータベースを管理するために Oracle Enterprise Manager Java Console を使用できます。Java Console は「管理者」インストール・タイプを使用してインストールします。

注意： 可能な場合は、Java Console ではなく Database Control を使用することをお勧めします。

Java Console を起動する手順は、次のとおりです。

1. 「スタート」メニューから「**ファイル名を指定して実行**」を選択します。
2. 次のコマンドを入力し、「**OK**」をクリックします。

```
oemapp console
```

注意： Oracle Enterprise Manager Java Console を「スタート」メニューから起動することもできます。「スタート」メニューから、「**プログラム**」→「**Oracle - HOME_NAME**」→「**Oracle Enterprise Manager Console**」を選択します。

Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) における Oracle9i の言語および定義ファイルの使用方法

Oracle9i データベースの言語および地域の定義ファイルを Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) で使用できます。Oracle Database がインストールされているコンピュータがこの機能を使用するように構成されている場合、この機能を各クライアント・コンピュータでも使用できるようにする必要があります。

この機能を使用可能にする手順は、次のとおりです。

1. cr9idata.pl スクリプト (デフォルトの場所は %ORACLE_HOME%\nls\data\old) を実行します。

選択した Client インストール・タイプにこのディレクトリが含まれていない場合、cr9idata.pl スクリプトはデフォルトの Oracle Database インストール内の同じディレクトリ・パスにあります。

2. ORA_NLS10 環境変数が、言語および地域の新规定義ファイルをインストールしたディレクトリ (デフォルトの場所は %ORACLE_HOME%\nls\data) を指すように設定します。
3. Oracle Database を再起動します。

関連資料：

- b_cr9idata 変数を設定して、Oracle Universal Installer で実行できるレスポンス・ファイルの詳細は、[付録 A「Oracle Database Client 拡張インストール」](#)を参照してください。
- このリリースの Oracle Database から影響を受けるグローバル化セッション・サポートの詳細は、[付録 B「Oracle Database Client グローバリゼーション・サポート」](#)を参照してください。
- NLS_LANG パラメータおよびグローバル化セッション・サポートの初期化パラメータの詳細は、『Oracle Database グローバリゼーション・サポート・ガイド』を参照してください。

製品固有のインストール後の必須作業 - Oracle Net Services の構成

適切なエントリを `tnsnames.ora` ファイルおよび `listener.ora` ファイルに追加することにより、Oracle Net Services と通信するように Oracle Database Client を構成できます。以前のリリースの Oracle ソフトウェアがある場合は、Oracle Net の `tnsnames.ora` および `listener.ora` 構成ファイルの情報を、以前のリリースから新しいリリースの対応するファイルにコピーできます。

注意： `tnsnames.ora` ファイルおよび `listener.ora` ファイルのデフォルトの場所は、`%ORACLE_HOME%\network\admin` ディレクトリです。

Oracle Database Client ソフトウェアの削除

この章では、Oracle のデータベース、インスタンスおよびソフトウェアの削除方法について説明します。Oracle コンポーネントを最初に削除する場合は、必ず **Oracle Universal Installer** を使用します。新規の Oracle インストールに関するインストールおよび構成の問題を回避するには、この章で説明する手順に従ってください。

この章の項目は次のとおりです。

- [Windows での Oracle サービスの停止](#)
- [Oracle Universal Installer を使用した Oracle Database Client の削除](#)
- [残りの Oracle Database Client コンポーネントの手動による削除方法](#)

関連資料： 個々の要件や制限については、コンポーネント固有のドキュメントを参照してください。

Windows での Oracle サービスの停止

Oracle コンポーネントまたはレジストリ・エントリを削除する前に、まず Oracle Windows サービスを停止する必要があります。

関連資料： サービス停止の詳細は、Microsoft のオンライン・ヘルプを参照してください。

Windows のサービスを停止する手順は、次のとおりです。

1. コントロールパネルの「サービス」を開きます。
 - Windows NT では、「スタート」メニューから「設定」→「コントロールパネル」→「サービス」を選択します。
 - Windows 2000 では、「スタート」メニューから「設定」→「コントロールパネル」→「管理ツール」→「サービス」を選択します。
 - Windows XP および Windows Server 2003 では、「スタート」メニューから「コントロールパネル」→「管理ツール」→「サービス」を選択します。
2. Oracle のサービス（Oracle または Ora で始まる名前）が存在し、状態が「開始」である場合、各サービスを選択して、「停止」をクリックします。
3. 「閉じる」をクリックして、「サービス」ウィンドウを終了します。
4. コントロールパネルを終了します。

Oracle Universal Installer を使用した Oracle Database Client の削除

最初に Oracle Universal Installer を使用して、コンピュータ上のインベントリから Oracle Database Client を削除します。残りのコンポーネントは、後から手動で削除する必要があります。この項の項目は次のとおりです。

- [Oracle Universal Installer を使用して Oracle Database Client を削除する際のガイドライン](#)
- [Oracle Universal Installer を使用して Oracle Database Client を削除する際の手順](#)

Oracle Universal Installer を使用して Oracle Database Client を削除する際のガイドライン

次のガイドラインに従います。

- 最初に Oracle Universal Installer を使用して削除していないのに、Oracle Database Client コンポーネントを手動で削除することはしないでください。インストール中に次の方法のいずれかを使用して Oracle Universal Installer を終了した場合は除きます。
 - 「取消」をクリックした場合
 - コンピュータの電源をオフにした場合
 - インストールが完了していない場合（つまり、すべての必須構成ツールが最後まで実行されていない）

これらの場合、Oracle Universal Installer ではインストールがそのインベントリに登録されません。ただし、ファイルは Oracle ホームにコピーされている可能性があります。これらのファイルは手動で削除し、インストールを再開します。

- Oracle ホームを手動で削除する必要がある場合、最初に Oracle Universal Installer を使用して Oracle コンポーネントを削除します。Oracle ホームを手動で削除する方法の一例として、Windows のエクスプローラまたはコマンド プロンプトを使用してディレクトリ構造を削除する方法があります。

コンポーネントが Oracle Universal Installer インベントリに登録されたままの状態のため、最初に Oracle ホームを手動で削除しないでください。その後、同じホームにインストールしようとする、Oracle Universal Installer によってコンポーネントがすでにインストールされていると判断されるため、選択したコンポーネントの一部またはすべてがインストールされない可能性があります。

Oracle Universal Installer を使用して Oracle Database Client を削除する際の手順

Oracle Universal Installer により、インストール中に Oracle コンポーネント用の Windows サービスが作成されます。ただし、Oracle Universal Installer では Oracle Net Configuration Assistant で作成されたすべてのサービスは削除されません。

Oracle Universal Installer を使用して Windows コンピュータでコンポーネントを削除する手順は、次のとおりです。

1. まず、5-2 ページの「**Windows での Oracle サービスの停止**」の手順に従います。
2. Oracle Universal Installer を起動します。起動方法は、インストールしている Oracle Database Client のバージョンによって異なります。
 - a. 「管理者」、「ランタイム」または「カスタム」バージョンの Oracle Database Client をインストールした場合、Oracle Universal Installer もインストールされます。「スタート」メニューから、「プログラム」→「Oracle - HOME_NAME」→「Oracle

Installation Products → **「Universal Installer」** を選択します。Oracle Universal Installer の「ようこそ」画面が表示されます。

- b. 「InstantClient」バージョンの Oracle Database Client をインストールした場合、Oracle Universal Installer はインストールされません。かわりに、インストール・メディアか、ダウンロードまたはコピーしたインストール・ファイル用に作成したインストール・ディレクトリから実行します。
- c. インストール・メディアから Oracle Universal Installer を起動するには、Oracle Database Client の CD を挿入します。Autorun 画面が自動的に表示されます。

Autorun 画面が表示されない場合は、「スタート」メニューから「**ファイル名を指定して実行**」を選択し、次のコマンドを入力します。

`DRIVE_LETTER:¥autorun¥autorun.exe`

Autorun 画面から**製品のインストール / 削除**を選択します。

- d. インストール・ディレクトリから Oracle Universal Installer を起動する場合は、`setup.exe` をダブルクリックします。
3. **「製品の削除」** ボタンをクリックします。
「インベントリ」画面が表示されます。
 4. 削除する Oracle ホームを選択します。Oracle ホームの選択したコンポーネントを削除する場合のみ、インストール済のコンポーネントのツリーを展開します。

たとえば、「ランタイム」オプションで Oracle Database Client をインストールし、後から「カスタム」オプションで追加コンポーネントをインストールした場合、Oracle ホーム・コンポーネントを展開して、Oracle ホームにインストールされているすべてのコンポーネントを表示します。
 5. 削除するコンポーネントのボックスを選択します。
 6. **「削除」** をクリックします。
「確認」画面が表示されます。
 7. **「はい」** をクリックして選択したコンポーネントを削除します。

注意：一部のコンポーネントを削除すると、他のコンポーネントが正常に機能しなくなる可能性があるというメッセージが表示される場合があります。

コンポーネントがコンピュータから削除されると、削除されたコンポーネントのない「インベントリ」画面が表示されます。

8. **「閉じる」** をクリックして、「インベントリ」画面を閉じます。
9. **「取消」** をクリックして、Oracle Universal Installer を終了します。

10. 「はい」をクリックして、終了を確認します。
11. Oracle Universal Installer を終了したら、次の項に進み、残りの Oracle Database Client コンポーネントを削除します。

残りの Oracle Database Client コンポーネントの手動による削除方法

Oracle Universal Installer では、すべての Oracle コンポーネントは削除されません。Oracle Universal Installer を使用して Oracle コンポーネントを削除した後、残ったレジストリ・キー、環境変数、「スタート」メニューのオプションおよびディレクトリを手動で削除する必要があります。

この項の項目は次のとおりです。

- [Windows におけるレジストリ エディタからの Oracle キーの削除](#)
- [PATH 環境変数のパスの更新](#)
- [「スタート」メニューからの Oracle Database Client の削除](#)
- [Oracle Database Client ディレクトリの削除](#)

注意：まれに、最初から Oracle Universal Installer を使用せずに、手動によりコンピュータから Oracle コンポーネントを完全に削除することで、システムの深刻な問題が解決することがあります。これはあくまでも最後の手段として行い、しかもシステムからすべての Oracle コンポーネントを削除する場合のみ行います。

Windows におけるレジストリ エディタからの Oracle キーの削除

Oracle Universal Installer では Oracle Net Configuration Assistant で作成されたすべてのサービスは削除されません。また、削除されないレジストリ・キーがその他にいくつかあります。次の各項のいずれかの手順に従い、存在するレジストリ・キーをすべて手動で削除する必要があります。

- [Oracle Net Services レジストリ・キーのみの削除](#)
- [すべての Oracle レジストリ・キーの削除](#)

注意： 自分の責任で Microsoft のレジストリ エディタを使用してください。レジストリ エディタを間違えて使用すると、深刻な問題が発生し、オペレーティング・システムを再インストールすることが必要になる可能性があります。

Oracle Net Services レジストリ・キーのみの削除

Oracle Net Services レジストリ・エントリが存在する場合、そのみを削除する手順は、次のとおりです。

1. 管理者グループのメンバーとしてログインします。
2. まず、5-2 ページの「[Windows での Oracle サービスの停止](#)」の手順に従います。
3. 「スタート」メニューから「ファイル名を指定して実行」を選択し、次のコマンドを入力します。

```
regedt32
```

4. HKEY_LOCAL_MACHINE¥SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services に移動し、OracleHOME_NAME¥TNSListener レジストリ・エントリを削除します。

Oracle Universal Installer を実行して Oracle Database Client を削除した場合、他のすべての Oracle Net Services が削除されています。

5. レジストリ エディタを終了します。
6. コンピュータを再起動します。

すべての Oracle レジストリ・キーの削除

Oracle レジストリ・キーが存在する場合、すべてのキーをコンピュータから削除する手順は、次のとおりです。

注意：これらの手順により、Oracle のコンポーネント、サービスおよびレジストリ・エントリがすべてコンピュータから削除されます。レジストリ・エントリを削除する際は、細心の注意を払ってください。間違ったエントリを削除すると、システムが故障する可能性があります。これらの手順を完了した後、%ORACLE_HOME%\¥DB_NAME の下のデータベース・ファイルを削除してください。

1. 管理者グループのメンバーとしてログインします。
2. まず、5-2 ページの「**Windows での Oracle サービスの停止**」の手順に従います。
3. 「スタート」メニューから「**ファイル名を指定して実行**」を選択し、次のコマンドを入力します。

```
regedt32
```

4. HKEY_CLASSES_ROOT に移動します。
5. 次で始まるキーを削除します。
 - ORAMMCPMON10
 - ORCLSSO

注意：Instant Client をインストールしている場合、これらのレジストリ・キーは表示されません。

6. HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE に移動します。
7. ORACLE Group キーを削除します。
8. Oracle Services for Microsoft Transaction Server をインストールしている場合、HKEY_LOCAL_MACHINE¥SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services¥Eventlog¥Application に移動します。
9. Oracle Services for Microsoft Transaction Server キーを削除します。
10. HKEY_CURRENT_USER¥Software に移動します。
11. Microsoft¥Windows¥CurrentVersion¥Explorer¥MenuOrder¥Start Menu¥Programs の下にある Oracle-HOME_NAME エントリなど、すべての Oracle キーを削除します。

12. レジストリ エディタを終了します。

13. コンピュータを再起動します。

PATH 環境変数のパスの更新

PATH 環境変数を確認し、すべての Oracle エントリを削除します。

1. 「スタート」メニューから「設定」→「コントロールパネル」→「システム」を選択します。「詳細」タブを選択し、「環境変数」をクリックします。

2. システム変数 PATH を選択して編集し、すべての Oracle エントリを削除します。

たとえば、PATH 変数に ORACLE_HOME を含む Oracle エントリを削除します。次のようなエントリを含む PATH 変数があります。

```
%ORACLE_HOME%\bin;%ORACLE_HOME%\jre\1.4.2\bin;%client%;%ORACLE_HOME%\jre\1.4.2\bin
```

3. すべての変更を保存し、コントロール パネルを終了します。

「スタート」メニューからの Oracle Database Client の削除

「スタート」メニューに Oracle Database Client エントリがないか確認し、あれば削除します。

Windows NT コンピュータの場合、次の手順に従います。

1. マイ コンピュータまたは Windows のエクスプローラを使用して、`SYSTEM_DRIVE:\WINNT\Profiles\All Users\Start Menu\Programs` フォルダにナビゲートします。

2. 「Oracle - HOME_NAME」フォルダを削除します。

Windows 2000 および Windows XP コンピュータの場合、次の手順に従います。

1. マイ コンピュータまたは Windows のエクスプローラを使用して、`SYSTEM_DRIVE:\Document and Settings\All Users\Start Menu\Programs` フォルダにナビゲートします。

2. 「Oracle - HOME_NAME」フォルダを削除します。

次の手順でも、Oracle Database Client メニューのエントリを削除できます。

1. 「スタート」ボタンを右クリックし、コンテキスト・メニューを表示します。

2. 「エクスプローラ - All Users」オプションを選択します。

3. 必要に応じて Start Menu\Programs フォルダを展開します。

4. 「Oracle - HOME_NAME」フォルダを削除します。

Oracle Database Client ディレクトリの削除

すべての Oracle Database Client レジストリ・キーを削除し、コンピュータを再起動した後、存在するすべての Oracle Database Client ディレクトリおよびファイルを削除します。

1. マイ コンピュータまたは Windows のエクスプローラを使用して、`SYSTEM_DRIVE:\program files\oracle` ディレクトリを削除します。
2. マイ コンピュータまたは Windows のエクスプローラを使用して、ハード・ドライブ上のすべての `ORACLE_BASE` ディレクトリを削除します。

Oracle Database Client 拡張インストール

この付録では、拡張インストールについて説明します。

この付録の項目は次のとおりです。

- 非対話モードでの Oracle コンポーネントのインストール
- 異なる言語の Oracle コンポーネント

非対話モードでの Oracle コンポーネントのインストール

通常、Oracle Universal Installer は対話モードで実行されます。つまり、Graphical User Interface (GUI) 画面で情報の入力を要求されます。あるいは、Oracle Universal Installer を非対話モードで実行できます。非対話モードはサイレント・モードまたはサイレント・インストールともいいます。

次のシナリオで Oracle Database Client をインストールする場合、非対話モードを使用します。

- Oracle Database Client を複数のノードに自動でデプロイする必要がある場合。オペレーティング・システムのスケジューラ、またはサイトで通常使用しているその他のジョブ・サブシステムから、非対話型インストール・モードをスケジュールできます。この方法は、多数の Oracle Database Client インストールを必要とする大規模サイトで特に役立ちます。
- ユーザーとの対話がない場合。
- 対話モードで Oracle Universal Installer を実行するグラフィカル機能を使用可能でない場合。(Oracle Universal Installer は、Windows では常に使用可能ですが、UNIX システムでは常に使用可能とはかぎりません。)

この項では、レスポンス・ファイルを使用して Oracle Universal Installer を非対話モードで実行する方法について、次のトピックを説明します。

- [レスポンス・ファイルを使用した非対話モードでの Oracle コンポーネントのインストール方法](#)
- [サンプル・レスポンス・ファイルのカスタマイズ](#)
- [新規レスポンス・ファイルの作成](#)
- [Oracle Universal Installer の実行およびレスポンス・ファイルの指定](#)

レスポンス・ファイルを使用した非対話モードでの Oracle コンポーネントのインストール方法

非対話モードを使用するには、レスポンス・ファイルを使用して Oracle Universal Installer を実行します。レスポンス・ファイルとは、インストール・プロセス中に Oracle Universal Installer で使用される変数および値が含まれているテキスト・ファイルです。カスタマイズできるサンプル・レスポンス・ファイルのセットが提供されています。またはインストールでの選択項目を記録することにより、独自のレスポンス・ファイルを作成できます。

関連資料：レスポンス・ファイルの書式の詳細は、『Oracle Universal Installer Concepts Guide』を参照してください。

サンプル・レスポンス・ファイルのカスタマイズ

表 A-1 に、「Oracle Database Client 10g リリース 1 (10.1)」という CD の ¥Response ディレクトリにあるサンプル・レスポンス・ファイルを示します。

表 A-1 レスポンス・ファイル

レスポンス・ファイル名	目的
netca.rsp	Client のインストール・タイプでの構成を実行する Oracle Net Configuration Assistant
clientadmin.rsp	Oracle Database Client の「管理者」インストール
clientcustom.rsp	Oracle Database Client の「カスタム」インストール
instantClient.rsp	Oracle Database Client の「InstantClient」インストール
clientruntime.rsp	Oracle Database Client の「ランタイム」インストール

レスポンス・ファイルをコピーおよび変更する手順は、次のとおりです。

1. 「Oracle Database Client 10g リリース 1 (10.1)」という CD の ¥Response ディレクトリから、適切なレスポンス・ファイルをハード・ドライブにコピーします。
2. Oracle Database Document Library CD-ROM または Oracle Technology Network の Web サイトで入手できる、『Oracle Universal Installer Concepts Guide』を開きます。
『Oracle Universal Installer Concepts Guide』が HTML 形式で表示されます。
3. レスポンス・ファイルと『Oracle Universal Installer Concepts Guide』の指示に従って、テキスト・エディタを使用してレスポンス・ファイルを変更します。
4. A-5 ページの「[Oracle Universal Installer の実行およびレスポンス・ファイルの指定](#)」の手順に従って、レスポンス・ファイルを実行します。

新規レスポンス・ファイルの作成

Oracle Universal Installer を対話モードで実行している場合、インストールでの選択項目をレスポンス・ファイルに記録できます。これを実行するには「記録」モードで Oracle Universal Installer を実行します。「サマリー」ページを完了するとすぐに Oracle Universal Installer によってレスポンス・ファイルが生成されるので、レスポンス・ファイルを作成するために Oracle Database Client をインストールする必要はありません。

非対話型インストール中に「記録」モードを使用する場合、Oracle Universal Installer によりオリジナル・ソースのレスポンス・ファイルに指定されていた変数の値が新規レスポンス・ファイルに記録されます。

新規レスポンス・ファイルを作成する手順は、次のとおりです。

1. レスポンス・ファイルを作成するコンピュータが、[第 2 章](#)の要件を満たしていることを確認します。
2. コマンドプロンプトで、cd コマンドを使用して、Oracle Universal Installer の setup.exe 実行可能ファイルが含まれているディレクトリに変更します。

インストール CD-ROM または DVD では、setup.exe はディスク 1 にあります。Oracle Universal Installer を既存の Oracle Database Client インストールから実行する場合、setup.exe のある場所は、選択したインストール・タイプによって次のように異なります。

- 管理者、ランタイムまたはカスタム：%ORACLE_HOME%\oui\bin ディレクトリ。
- InstantClient: Oracle Universal Installer は Instant Client に付属していませんが、既存の Oracle Database インストールから %ORACLE_HOME%\oui\bin ディレクトリにあるこのファイルにアクセスできます。

3. 次のコマンドを入力します。

```
setup -record -destinationFile response_file_name
```

response_file_name を、新規レスポンス・ファイルの完全パスに置き換えます。たとえば、次のようになります。

```
setup -record -destinationFile C:\response_files\install_oracle10g
```

4. Oracle Universal Installer が起動したら、インストールの設定を入力します。この設定はレスポンス・ファイルに記録されます。
5. 「サマリー」ページが表示されたら、次のいずれかを実行します。

- 「インストール」をクリックしてインストールを続行します。
- レスポンス・ファイルを作成するだけで、インストールを続行しない場合は、「取消」をクリックします。インストールは停止しますが、入力した設定はレスポンス・ファイルに記録されます。

その後、Oracle Universal Installer により、コマンドラインで指定したパスとファイル名を使用して新規レスポンス・ファイルが保存されます。

- 必要に応じて、レスポンス・ファイルを実行するコンピュータの環境に固有の変更を、レスポンス・ファイルに加えます。
- 次の「[Oracle Universal Installer の実行およびレスポンス・ファイルの指定](#)」の手順に従って、レスポンス・ファイルを実行します。

Oracle Universal Installer の実行およびレスポンス・ファイルの指定

コマンドラインでレスポンス・ファイルを指定して、Oracle Universal Installer を実行します。Oracle Universal Installer の実行可能ファイル (setup.exe) には、いくつかのオプションが用意されています。たとえば、これらのオプションのフル・セットに関するヘルプ情報を表示するには、次のように `-help` オプションを指定して `setup.exe` を実行します。

```
C:\¥%ORACLE_HOME%\oui¥bin> setup.exe -help
```

Oracle Universal Installer を実行し、レスポンス・ファイルを指定する手順は、次のとおりです。

- コマンドプロンプトを起動します。
- Oracle Universal Installer がインストールされているディレクトリに移動します。
- コマンドラインから、適切なレスポンス・ファイルを指定して、Oracle Universal Installer を実行します。たとえば、次のようになります。

```
C:\¥%ORACLE_HOME%\oui¥bin> setup.exe [-silent] [-nowelcome] [-nowait]  
-responseFile filename
```

要素	説明
<i>filename</i>	レスポンス・ファイルのフル・パスを指定します。
<code>-silent</code>	Oracle Universal Installer をサイレント・モードで実行します。「ようこそ」画面は表示されません。 <code>-silent</code> を使用する場合、 <code>-nowelcome</code> は必要ありません。
<code>-nowelcome</code>	インストール時に表示される「ようこそ」画面が表示されません。
<code>-nowait</code>	サイレント・インストールの完了時にコンソール・ウィンドウを閉じます。
<code>-help</code>	setup.exe オプションのフル・セットのヘルプ情報を表示します。

関連資料：

- レスポンス・ファイルを使用したインストールの詳細は、『Oracle Universal Installer Concepts Guide』の Oracle 製品のインストールに関する項を参照してください。
- レスポンス・ファイルを使用した削除の詳細は、『Oracle Universal Installer Concepts Guide』の製品の削除に関する項を参照してください。

異なる言語の Oracle コンポーネント

この項では、次の機能について説明します。

- 異なる言語での [Oracle Universal Installer](#) の実行
- 異なる言語での [Oracle コンポーネント](#) の使用

異なる言語での Oracle Universal Installer の実行

Oracle Universal Installer は、デフォルトではオペレーティング・システム用に選択した言語を使用して実行されます。Oracle Universal Installer は次の言語でも実行できます。

- ポルトガル語（ブラジル）
- ドイツ語
- 日本語
- 中国語（簡体字）
- 中国語（繁体字）
- フランス語
- イタリア語
- 韓国語
- スペイン語

Oracle Universal Installer を異なる言語で実行する手順は、次のとおりです。

1. オペレーティング・システムの実行されている言語を変更します。たとえば、Windows 2000 の場合は次のようにします。
 - a. 「スタート」メニューから「設定」→「コントロールパネル」→「地域のオプション」を選択します。
 - b. 前述の言語から 1 つを選択して、「OK」を選択します。
2. 3-8 ページの「[Oracle Database Client ソフトウェアのインストール](#)」の手順に従って、Oracle Universal Installer を実行します。

注意： 選択した言語が NLS_LANG レジストリ・パラメータに割り当てられません。

異なる言語での Oracle コンポーネントの使用

Oracle コンポーネント（Oracle Net Configuration Assistant など）で使用する言語として、他の言語を選択できます。しかし、これにより Oracle Universal Installer の実行に使用される言語が変わるわけではありません。Oracle コンポーネントを選択した言語で実行するには、言語をオペレーティング・システムの言語設定と同じにする必要があります。オペレーティング・システムの言語は「コントロールパネル」の「地域の設定」ウィンドウで変更できます。

異なる言語で Oracle コンポーネントを使用する手順は、次のとおりです。

1. 3-9 ページの「[Oracle Database Client のインストールの手順](#)」の手順に従って、Oracle Universal Installer を起動します。
2. 「インストールする製品の選択」画面で「**製品の言語**」を選択します。
3. 「言語の選択」画面で、「**使用可能な言語**」フィールドから Oracle コンポーネントで使用する言語を選択します。
4. 矢印ボタンを使用して言語を「**選択された言語**」フィールドに移動し、「OK」をクリックします。
5. インストールする製品を適宜選択し、「**次へ**」を選択します。

インストールの完了後、インストールされたコンポーネントのダイアログ・ボックスの文字、メッセージおよびオンライン・ヘルプが、選択した言語で表示されます。

Oracle Database Client グローバリゼーション・サポート

この付録では、グローバリゼーション・サポートについて説明します。

この付録の項目は次のとおりです。

- [NLS_LANG パラメータ](#)
- [一般に使用される NLS_LANG の値](#)
- [MS-DOS モードおよびバッチ・モードでの NLS_LANG 設定](#)

NLS_LANG パラメータ

Oracle では、グローバリゼーション・サポートが提供されています。これによりユーザーは、NLS_LANG パラメータによって定義された各自の言語でデータベースと対話ができます。Oracle Database Client コンポーネントをインストールすると、Oracle Universal Installer により NLS_LANG パラメータがレジストリに設定されます。

オペレーティング・システムのロケール設定により、NLS_LANG パラメータの値がインストール時に決定されます。B-3 ページの表 B-1 に、オペレーティング・システムのロケールと NLS_LANG 値のマッピングを示します。

NLS_LANG パラメータは、HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\ORACLE\HOMEID\NLS_LANG サブキーのレジストリに格納されています。ID は、Oracle ホームを識別する一意の番号です。

NLS_LANG パラメータは、次の形式です。

NLS_LANG = LANGUAGE_TERRITORY.CHARACTER_SET

要素の意味は次のとおりです。

パラメータ	説明
LANGUAGE	言語と、その言語でメッセージ、曜日、月を示すための規則を指定します。
TERRITORY	地域と、その地域で週数と日数を計算するための規則を指定します。
CHARACTER_SET	メッセージを表示するために使用されるキャラクタ・セットを制御します。

関連資料：

- 複数の Oracle ホームに対するサブキーの場所の詳細は、『Oracle Database プラットフォーム・ガイド』を参照してください。
- NLS_LANG パラメータおよびグローバリゼーション・サポートの初期化パラメータの詳細は、『Oracle Database グローバリゼーション・サポート・ガイド』を参照してください。

一般に使用される NLS_LANG の値

表 B-1 は、様々なオペレーティング・システムのロケールに対して一般に使用される NLS_LANG 値の一覧です。

表 B-1 NLS_LANG パラメータの値

オペレーティング・システムの ロケール	NLS_LANG の値
アラビア語 (U.A.E.)	ARABIC_UNITED ARAB EMIRATES.AR8MSWIN1256
ブルガリア語	BULGARIAN_BULGARIA.CL8MSWIN1251
カタロニア語	CATALAN_CATALONIA.WE8MSWIN1252
中国語 (簡体字)	SIMPLIFIED CHINESE_CHINA.ZHS16GBK
中国語 (繁体字)	TRADITIONAL CHINESE_TAIWAN.ZHT16MSWIN950
クロアチア語	CROATIAN_CROATIA.EE8MSWIN1250
チェコ語	CZECH_CZECH REPUBLIC.EE8MSWIN1250
デンマーク語	DANISH_DENMARK.WE8MSWIN1252
オランダ語 (オランダ)	DUTCH_THE NETHERLANDS.WE8MSWIN1252
英語 (イギリス)	ENGLISH_UNITED KINGDOM.WE8MSWIN1252
英語 (アメリカ)	AMERICAN_AMERICA.WE8MSWIN1252
エストニア語	ESTONIAN_ESTONIA.BLT8MSWIN1257
フィンランド語	FINNISH_FINLAND.WE8MSWIN1252
フランス語 (カナダ)	CANADIAN FRENCH_CANADA.WE8MSWIN1252
フランス語 (フランス)	FRENCH_FRANCE.WE8MSWIN1252
ドイツ語 (ドイツ)	GERMAN_GERMANY.WE8MSWIN1252
ギリシア語	GREEK_GREECE.EL8MSWIN1253
ヘブライ語	HEBREW_ISRAEL.IW8MSWIN1255
ハンガリア語	HUNGARIAN_HUNGARY.EE8MSWIN1250
アイスランド語	ICELANDIC_ICELAND.WE8MSWIN1252
インドネシア語	INDONESIAN_INDONESIA.WE8MSWIN1252
イタリア語 (イタリア)	ITALIAN_ITALY.WE8MSWIN1252

表 B-1 NLS_LANG パラメータの値（続き）

オペレーティング・システムの ロケール	NLS_LANG の値
日本語	JAPANESE_JAPAN.JA16SJIS
韓国語	KOREAN_KOREA.KO16MSWIN949
ラトビア語	LATVIAN_LATVIA.BLT8MSWIN1257
リトアニア語	LITHUANIAN_LITHUANIA.BLT8MSWIN1257
ノルウェー語	NORWEGIAN_NORWAY.WE8MSWIN1252
ポーランド語	POLISH_POLAND.EE8MSWIN1250
ポルトガル語（ブラジル）	BRAZILIAN_PORTUGUESE_BRAZIL.WE8MSWIN1252
ポルトガル語（ポルトガル）	PORTUGUESE_PORTUGAL.WE8MSWIN1252
ルーマニア語	ROMANIAN_ROMANIA.EE8MSWIN1250
ロシア語	RUSSIAN_CIS.CL8MSWIN1251
スロバキア語	SLOVAK_SLOVAKIA.EE8MSWIN1250
スペイン語（スペイン）	SPANISH_SPAIN.WE8MSWIN1252
スウェーデン語	SWEDISH_SWEDEN.WE8MSWIN1252
タイ語	THAI_THAILAND.TH8TISASCII
スペイン語（メキシコ）	MEXICAN_SPANISH_MEXICO.WE8MSWIN1252
スペイン語（ベネズエラ）	LATIN_AMERICAN_SPANISH_VENEZUELA.WE8MSWIN1252
トルコ語	TURKISH_TURKEY.TR8MSWIN1254
ウクライナ語	UKRAINIAN_UKRAINE.CL8MSWIN1251
ベトナム語	VIETNAMESE_VIETNAM.VN8MSWIN1258

MS-DOS モードおよびバッチ・モードでの NLS_LANG 設定

SQL*Plus、SQL Loader、Import、Export などの Oracle Utilities を MS-DOS モードで使用する前に、そのセッションの NLS_LANG パラメータのキャラクタ・セット・フィールドが正しい値に設定されていることを確認します。

いくつかの例外はありますが、MS-DOS モードでは、Windows（ANSI コードページ）とは異なるキャラクタ・セット（またはコードページ）を使用し、レジストリでは、デフォルトの Oracle ホームの NLS_LANG パラメータが常に該当する Windows コードページに設定されているため、このように正しい値の設定が必要になります。MS-DOS モード・セッションの NLS_LANG パラメータを正しく設定していない場合、文字の変換が正しく行われなかったために、エラー・メッセージやデータが破損します。

日本語、韓国語、中国語（簡体字）および中国語（繁体字）では、MS-DOS コードページは ANSI コードページと同一です。この場合、MS-DOS モードで NLS_LANG を設定する必要はありません。

同様に、バッチ・モードで、プロシージャで処理されるファイルのキャラクタ・セットに応じて、バッチ・プロシージャの開始時に、SET NLS_LANG コマンドを挿入し、NLS_LANG に正しいキャラクタ・セットの値を設定します。

表 B-2 は、様々なオペレーティング・システムのロケールに対する MS-DOS モードに対応する Oracle キャラクタ・セットの一覧です。

表 B-2 オペレーティング・システムのロケールに対する Oracle キャラクタ・セット

オペレーティング・システムのロケール	キャラクタ・セット
カタロニア語	WE8PC850
中国語（簡体字）	ZHS16GBK
中国語（繁体字）	ZHT16MSWIN950
チェコ語	EE8PC852
デンマーク語	WE8PC850
オランダ語	WE8PC850
英語（イギリス）	WE8PC850
英語（アメリカ）	US8PC437
フィンランド語	WE8PC850
フランス語	WE8PC850
ドイツ語	WE8PC850
ギリシア語	EL8PC737

表 B-2 オペレーティング・システムのロケールに対する Oracle キャラクタ・セット (続き)

オペレーティング・システムのロケール	キャラクタ・セット
ハンガリア語	EE8PC852
イタリア語	WE8PC850
日本語	JA16SJIS
韓国語	KO16MSWIN949
ノルウェー語	WE8PC850
ポーランド語	EE8PC852
ポルトガル語	WE8PC850
ルーマニア語	EE8PC852
ロシア語	RU8PC866
スロバキア語	EE8PC852
スロベニア語	EE8PC852
スペイン語	WE8PC850
スウェーデン語	WE8PC850
トルコ語	TR8PC857
カタロニア語	WE8PC850

関連資料： Oracle Internet Directory グローバリゼーション・サポートの問題、および Oracle Internet Directory 環境の様々なコンポーネントとツールに必要な NLS_LANG 環境変数については、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』のディレクトリにおけるグローバリゼーション・サポートに関する項を参照してください。

Oracle Database Client のインストールの トラブルシューティング

この付録では、トラブルシューティングについて説明します。

この付録の項目は次のとおりです。

- 要件の確認
- インストール・エラーが発生した場合の操作
- インストール・セッションのログの確認
- Configuration Assistant のトラブルシューティング
- 非対話型インストールでのレスポンス・ファイルのエラー処理
- インストール失敗後のクリーン・アップ

要件の確認

この付録に示すトラブルシューティングの手順を実行する前に、次を実行してください。

- システムが要件を満たしていることと、第2章「[Oracle Database Client のインストール前の要件](#)」に示したインストール前の作業をすべて完了していることを確認してください。
- 製品をインストールする前に、該当するプラットフォーム用の製品に関するリリース・ノートを参照してください。リリース・ノートは、Oracle Database Client のインストール・メディアで提供されています。リリース・ノートの最新バージョンは、次の Oracle Technology Network Japan の Web サイトにあります。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

インストール・エラーが発生した場合の操作

インストール中にエラーが発生した場合は、次のように操作してください。

- Oracle Universal Installer を終了しないでください。
- インストール画面の1つに間違っただけの情報を入力して「次へ」をクリックした場合は、「戻る」をクリックして元の画面に戻り、情報を訂正します。
- Oracle Universal Installer によるファイルのコピーまたはリンク中にエラーが発生した場合は、C-2 ページの「[インストール・セッションのログの確認](#)」を参照してください。
- Configuration Assistant の実行中にエラーが発生した場合は、C-3 ページの「[Configuration Assistant のトラブルシューティング](#)」を参照してください。
- 問題を解決できない場合は、C-4 ページの「[インストール失敗後のクリーン・アップ](#)」の手順に従って、失敗したインストールを削除してください。

インストール・セッションのログの確認

Oracle Universal Installer を Oracle ソフトウェアがインストールされていないコンピュータで実行する場合、次のディレクトリが作成されます。

```
SYSTEM_DRIVE:\Program Files\Oracle\Inventory\logs
```

この最初のインストールおよびその後のすべてのインストール中、Oracle Universal Installer により実行されるすべてのアクションがこのディレクトリのログ・ファイルに記録されます。インストール中にエラーが発生した場合は、問題の原因と考えられる情報をログ・ファイルで確認してください。

ログ・ファイル名は次の形式になります。

```
installActionsdate_time.log
```


たとえば、インストールを 2004 年 5 月 14 日 9:00:56 A.M. に行った場合、ログ・ファイルは次のような名前になります。

```
installActions2004-05-14_09-00-56-am.log
```

注意：Inventory ディレクトリまたはその内容の削除や、手動での変更は行わないでください。削除や変更を行うと、Oracle Universal Installer でシステムにインストールする製品を見つけられなくなります。

Configuration Assistant のトラブルシューティング

Configuration Assistant の実行中に発生したインストール・エラーのトラブルシューティング方法は、次のとおりです。

- C-2 ページの「[インストール・セッションのログの確認](#)」に示したインストール・ログ・ファイルを確認します。
- %ORACLE_HOME%\cfgttoollogs ディレクトリにある特定の Configuration Assistant のログ・ファイルを確認します。エラーの原因となった問題を修正します。
- 致命的エラー。再インストール・メッセージが表示された場合は、ログ・ファイルを確認して問題の原因を調べます。手順の詳細は、C-4 ページの「[致命的エラー](#)」を参照してください。

Configuration Assistant の障害

Oracle Configuration Assistant の障害は、インストール画面の最下部に表示されます。追加情報がある場合は、Configuration Assistant インタフェースに表示されます。Configuration Assistant の実行ステータスは、installActionsdate_time.log ファイルに格納されます。

次の表に、実行ステータス・コードを示します。

ステータス	結果コード
Configuration Assistant の正常終了	0
Configuration Assistant の異常終了	1
Configuration Assistant の取消済	-1

致命的エラー

Configuration Assistant の実行中に致命的エラーが発生した場合は、次のようにします。

1. C-4 ページの「[インストール失敗後のクリーン・アップ](#)」の説明に従って、失敗したインストールを削除します。
2. 致命的エラーの原因を修正します。
3. Oracle ソフトウェアを再インストールします。

非対話型インストールでのレスポンス・ファイルのエラー処理

非対話型インストールが正常に実行されたかどうかを判断するには、Inventory ディレクトリにある `installActionsdate_time.log` ファイルを確認します。必要な場合は、前述の項を参照して Inventory ディレクトリの場所を確認してください。

サイレント・インストールは、次の場合に失敗します。

- レスポンス・ファイルを指定していない場合
- 不正または不完全なレスポンス・ファイルを指定している場合
- Oracle Universal Installer にディスク領域不足などのエラーが発生した場合

Oracle Universal Installer または Configuration Assistant は、実行時にレスポンス・ファイルの妥当性を検証します。検証に失敗した場合、非対話型インストールまたは構成プロセスは終了します。Oracle Universal Installer では、コンテキスト、書式またはタイプが不正な場合、そのパラメータ値は、ファイルに指定されていないとみなされます。

インストール失敗後のクリーン・アップ

インストールが失敗した場合は、インストール中に作成されたファイルを削除し、Oracle ホーム・ディレクトリを削除する必要があります。[第 5 章「Oracle Database Client ソフトウェアの削除」](#)の手順に従って、Oracle Universal Installer を実行し、Oracle Database Client の削除、Oracle ディレクトリの手動による削除、およびレジストリ エディタからの Oracle キーの削除を行います。その後、ソフトウェアを再インストールします。

用語集

ldap.ora ファイル (ldap.ora file)

Oracle Net Configuration Assistant によって作成されるファイルで、次のディレクトリ・アクセス情報を含む。

- ディレクトリのタイプ
- ディレクトリの場所
- クライアントまたはサーバーがデータベース・サービスへの接続用の接続識別子を参照または構成するために使用するデフォルトの管理コンテキスト

ldap.ora ファイルは、%ORACLE_HOME%\network\admin にある。

listener.ora ファイル (listener.ora file)

次の項目を識別するためのリスナー用構成ファイル。

- リスナー名
- リスナーが接続要求を受け付けるプロトコル・アドレス
- リスニング対象のサービス

listener.ora ファイルは、%ORACLE_HOME%\network\admin にある。

Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) では、サービス登録により、データベース・サービスを識別する必要がある。ただし、Oracle Enterprise Manager を使用する場合は、Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) に静的なサービス構成が必要。

OPSS\$

初期化ファイル・パラメータ `OS_AUTHENT_PREFIX` により、データベースに接続するユーザーを認証するために Oracle で使用される接頭辞をユーザーが指定できる。Oracle では、このパラメータの値をユーザーのオペレーティング・システム・アカウント名およびパスワードの前に連結する。接続要求が発行されると、Oracle では接頭辞の付いたユーザー名をデータベース内の Oracle ユーザー名と比較する。

このパラメータのデフォルト値は "" (NULL 文字列) で、そのためオペレーティング・システム・アカウント名には接頭辞が追加されない。旧リリースでは、OPSS\$ (オペレーティング・システム固有の短縮名) がデフォルト設定であった。

Oracle Database Document Library CD-ROM

Oracle Database Document Library CD-ROM が含まれるキット内の CD。Oracle Database Document Library CD-ROM は、コンポーネント CD とは別である。

Oracle Database Document Library CD-ROM には、このインストール・ガイドまたは『Oracle Database Client リリース・ノート』は含まれていない。これらのドキュメントは最初のコンポーネント CD のみに含まれている。

Oracle Net Foundation レイヤー (Oracle Net foundation layer)

クライアント・アプリケーションとサーバー間の接続の確立と維持、およびこれらの間でのメッセージ交換を行うネットワーク通信レイヤー。

Oracle コンテキスト (Oracle Context)

相対識別名が `cn=OracleContext` のディレクトリ・サブツリーのルートで、すべての Oracle ソフトウェア情報が保持される。1つのディレクトリ内に1つ以上の Oracle コンテキストが存在する場合がある。Oracle コンテキストは、ディレクトリ・ネーミング・コンテキストと関連付けることができる。

Oracle コンテキストには、次の Oracle エントリを含めることができる。

- Oracle Net Services ディレクトリ・ネーミングとともに使用してデータベース接続を行う接続識別子
- Oracle Advanced Security とともに使用するエンタープライズ・ユーザー・セキュリティ

Oracle スキーマ (Oracle schema)

LDAP 準拠のディレクトリ・サーバーに格納できるものを決定する規則の集合。Oracle には、Oracle Net Services エントリなど、多くの Oracle エントリ・タイプに適用される独自のスキーマがある。Oracle Net Services エントリ用の Oracle スキーマは、エントリに含まれる属性を含む。

Oracle ホーム (Oracle home)

Oracle コンポーネントをインストールするディレクトリ・パス (c:\¥oracle¥product¥10.1.0¥db_n など。ここで n は Oracle ホームの番号)。Oracle Universal Installer の「ファイルの場所の指定」ウィンドウの「パス」フィールドで、Oracle ホームの入力が要求される。

Oracle ホーム名 (Oracle home name)

現行の Oracle ホームの名前。各 Oracle ホームには、コンピュータ上の他のすべての Oracle ホームと区別するために名前が付いている。インストール中、Oracle Universal Installer の「ファイルの場所の指定」ウィンドウの「名前」フィールドで、Oracle ホーム名の入力が要求される。

SID

データベースをコンピュータにあるその他すべてのデータベースと区別する Oracle システム識別子。SID は、文字が 8 文字以上かまたはピリオドを入力しないかぎり、グローバル・データベース名のデータベース名部分 (たとえば、sales.us.acme.com の sales) に自動的にデフォルト設定される。デフォルト値は、そのまま確定することも、変更することもできる。

sqlnet.ora ファイル (sqlnet.ora file)

クライアントまたはサーバーの構成ファイルで、次のものを指定する。

- 修飾されていないサービス名またはネット・サービス名に追加するクライアント・ドメイン
- 名前を解決するときにクライアントにより使用されるネーミング・メソッドの順序
- 使用するログイン機能およびトレース機能
- 接続の経路
- 外部ネーミング・パラメータ
- Oracle Advanced Security パラメータ

sqlnet.ora ファイルは、%ORACLE_HOME%\¥network¥admin にある。

Terminal Server

Microsoft Windows Terminal Server は、Windows シン・クライアントのターミナル・サーバーで、Windows NT Server 上の複数の同時クライアント・セッションに対するサポートを追加する製品。Windows Terminal Server では、オペレーティング・システムの Graphical User Interface (GUI) を Oracle データベースのユーザーに提供する。

tnsnames.ora ファイル (tnsnames.ora file)

接続記述子にマップされるネット・サービス名を含む構成ファイル。このファイルは、ローカル・ネーミング・メソッド用に使用される。tnsnames.ora ファイルは、
%ORACLE_HOME%\network\admin にある。

UNC

「[汎用命名規則 \(UNC\)](#)」を参照。

インストール・タイプ (installation type)

インストールするコンポーネントを自動的に選択する事前定義のコンポーネント・セット。各最上位コンポーネントで使用可能なインストール・タイプのリストは、1-3 ページの「[Oracle Database Client のインストール・タイプ](#)」を参照。

オペレーティング・システム認証による接続 (operating system authenticated connections)

Windows ログイン接続情報を Oracle Database に接続するユーザーの認証に使用できる。Windows 固有の認証には、次の利点がある。

- ユーザーはユーザー名やパスワードを入力しなくても、複数の Oracle Database に接続できる。
- Oracle Database のユーザー認証情報を Windows で一元管理することによって、Oracle Database でユーザー・パスワードを保管または管理する必要がない。

外部プロシージャ (external procedures)

Oracle サーバー上で実行される PL/SQL ルーチンでは、C プログラミング言語で記述され、共有ライブラリに保存されている外部プロシージャまたはファンクションをコールできる。Oracle Database が外部プロシージャに接続するには、サーバーをネット・ワーク・サービス名で構成し、[リスナー](#)をプロトコル・アドレスおよびサービス情報で構成する必要がある。

簡易接続ネーミング (easy connect naming)

構成不要でクライアントによるデータベース・サーバーへの接続を可能にする[ネーミング・メソッド](#)。クライアントは、ホスト名とオプションのポート番号、サービス名およびインスタンス名から構成される簡単な TCP/IP アドレスを使用する。

```
CONNECT username/password@host[:port] [/service_name] [/instance_name]
```

グローバル・データベース名 (global database name)

データベースをネットワーク・ドメインの他のデータベースから一意に区別する完全データベース名。

たとえば、次のようになる。

`sales.us.acme.com`

`sales` はデータベース名、`us.acme.com` はデータベースが置かれているネットワーク・ドメイン。

サービス登録 (service registration)

PMON プロセス (インスタンス・バックグラウンド・プロセス) がリスナーに情報を自動的に登録する機能。この情報はリスナーに登録されるため、[listener.ora ファイル](#)はこの静的情報で構成される必要がない。

サービス登録により、リスナーには次の情報が提供される。

- データベースの実行中の各インスタンスのサービス名
- データベースのインスタンス名
- 各インスタンスで使用可能なサービス・ハンドラ (ディスパッチャおよび専用サーバー)

これにより、リスナーがクライアントの要求を正しく送信できる。

- ディスパッチャ、インスタンスおよびノードのロード情報

これにより、リスナーがクライアントの接続要求を処理できる最良のディスパッチャを決定できる。すべてのディスパッチャがふさがっている場合、リスナーはその接続専用のサーバーを生成することができる。

この情報により、リスナーはクライアントの接続要求を処理するための最良の方法を決定できる。

システム識別子 (system identifier)

「[SID](#)」を参照。

修飾されていない名前 (unqualified name)

ネットワーク・ドメインを含まないネット・サービス名。

接続記述子 (connect descriptor)

特別にフォーマットされた、ネットワーク接続のための宛先の記述。接続記述子は、宛先サービスおよびネットワーク経路情報を含む。

宛先サービスは、Oracle Database の場合はサービス名、リリース 8.0 またはバージョン 7 の Oracle データベースでは、Oracle システム識別子 ([SID](#)) を使用して表される。ネットワーク・ルートは、少なくとも、ネットワーク・アドレスを使用して [リスナー](#) の場所を示す。

接続識別子 (connect identifier)

接続記述子を解決する名前、ネット・サービス名またはサービス名。ユーザーは、接続するサービスに対する接続文字列内に、接続識別子とともにユーザー名およびパスワードを渡すことで接続要求を開始する。たとえば、次のようにする。

```
SQL> CONNECT username/password@connect_identifier
```

デフォルト・ドメイン (default domain)

ほとんどのクライアント要求が発生するネットワーク・ドメイン。クライアントが置かれるドメイン、またはクライアントがネットワーク・サービスを要求するドメインとなることがある。デフォルト・ドメインは、修飾されていないネットワーク名要求に追加されるドメインを決定するクライアント構成パラメータにもなる。"." 文字を含まない場合、名前要求は修飾されない。

ネーミング・メソッド (naming method)

クライアント・アプリケーションで、データベース・サービスへの接続の際、接続識別子をネットワーク・アドレスに解決するために使用される解決方法。Oracle Net Services は、次のネーミング・メソッドをサポートする。

- ローカル・ネーミング
- ディレクトリ・ネーミング
- ホスト・ネーミング
- 外部ネーミング

ネット・サービス名 (net service name)

接続記述子に解決されるサービスの単純名。ユーザーは、接続するサービスに対する接続文字列内に、ネット・サービス名とともにユーザー名およびパスワードを渡すことで接続要求を開始する。

```
SQL> CONNECT username/password@net_service_name
```

必要に応じて、ネット・サービス名は次のような様々な場所に格納できる。

- 各クライアントのローカル構成ファイル (tnsnames.ora)
- ディレクトリ・サーバー
- 外部ネーミング・サービス (Network Information Service (NIS)、セル・ディレクトリ・サービス (CDS) など)

汎用命名規則 (Universal Naming Convention: UNC)

汎用命名規則は、ネットワーク・ドライブをドライブ名にマップせずに、ネットワーク上のファイルにアクセスする手段を提供する。UNC 名は、次のように構成される。

```
¥¥computer name¥share name¥filename
```


標準構成 (typical configuration)

Oracle Database Client と Oracle Database 間の接続のデフォルト構成を実行する Oracle Universal Installer のオプション。次を構成する。

- **外部プロシージャ**への接続用に確立される、**tnsnames.ora ファイル**内の 1 つのネット・サービス名
- **sqlnet.ora ファイル**内の**ローカル・ネーミング**および**簡易接続ネーミング**・メソッド

Oracle Database Client が接続しようとする際、最初にローカル・ネーミングを使用し、次に簡易接続ネーミングを使用する。

プロセス間通信 (Interprocess Communication: IPC)

クライアント・アプリケーションで使用されるプロトコルで、データベースとの通信のために**リスナー**と同じノードに置かれる。IPC は、TCP/IP より高速なローカル接続を提供する。

プロトコル・アドレス (protocol address)

ネットワーク・オブジェクトのネットワーク・アドレスを識別するアドレス。

接続が行われるとき、クライアントとその要求の受信者 (**リスナー**または **Oracle Connection Manager**) は同じプロトコル・アドレスを使用して構成される。クライアントはこのアドレスを使用して接続要求を特定のネットワーク・オブジェクトの位置に送信し、受信者はこのアドレスで要求のリスニングを行う。クライアントと接続受信者に対して同じプロトコルをインストールし、同じアドレスを構成することが重要である。

リスナー (listener)

サーバーに常駐するプロセスで、クライアントからの接続要求のリスニング、およびサーバーへの通信量の管理を行う。

クライアントがデータベース・サーバーとのネットワーク・セッションを要求するときに、リスナーは実際の要求を受け取る。クライアント情報がリスナー情報と一致した場合、リスナーはデータベース・サーバーへの接続を許可する。

リポジトリ (repository)

Oracle Management Server からアクセス可能な Oracle データベースにある表の集合。Oracle Management Server では、すべてのシステム・データおよびアプリケーション・データ、環境全体に分散している管理対象ノードの状態についての情報、別にライセンスを受けられる管理パックに関する情報を格納するために、リポジトリが使用される。

ローカル・ネーミング (local naming)

ネット・サービス名を接続記述子に解決する**ネーミング・メソッド**。この名前は、各クライアントの **tnsnames.ora ファイル**に構成および保存される。

索引

A

ASM, 「自動ストレージ管理 (ASM)」を参照

C

CD-ROM ドライブ, インストール, 3-4

clientcustom.rsp ファイル, A-3

Configuration Assistant

トラブルシューティング, C-3

D

DCE Adapter Support, 2-6

DVD ドライブ, インストール, 3-4

E

Entrust PKI Support, 2-6

G

Generic Connectivity, 2-6

I

installActions.log ファイル, C-2

Instant Client

LOCAL 環境変数, データベースへの接続, 4-5

Oracle Call Interface を使用したデータベースへの
接続, 4-4

Oracle Database への接続, 4-3

TNS_ADMIN 環境変数, データベースへの接続,
4-5

tnsnames.ora ファイルによる接続方法, 4-4

空の接続文字列, 4-5

直接アドレッシングによる接続方法, 4-3

InstantClient

インストール・タイプ, 1-3

J

Java Runtime Environment (JRE)

変更のガイドライン, 3-9

要件, 2-2

JRE, 「Java Runtime Environment (JRE)」を参照

L

listener.ora ファイル

Oracle Net Services の構成, 4-8

LOCAL 環境変数, 4-5

M

Microsoft レジストリ エディタ, 「レジストリ エディ
タ」を参照

MS-DOS モード, NLS_LANG パラメータの設定, B-5

N

nCipher Accelerator Support, 2-6

NetCA, 「Oracle Net Configuration Assistant」を参照

netca_clt.rsp ファイル, A-3

NLS_LANG パラメータ, B-2

MS-DOS モードおよびバッチ・モードでの設定,
B-5

地域およびキャラクタ・セットのデフォルト値,
B-3

NTFS システム, ハード・ディスク領域要件, 2-2

NTS の有効化, 自動ストレージ管理, 4-2

O

ORA_NLS10 環境変数, 4-7

Oracle Administration Assistant for Windows, 3-3

Oracle Call Interface

Instant Client 接続方法, 4-4

「Instant Client」を参照

Oracle Counters for Windows Performance Monitor,
3-3

Oracle Database

Instant Client への接続, 4-3

Oracle Database Client からの接続, 4-2

自動ストレージ管理, 通信の構成, 4-2

Oracle Database Client

インストールのガイドライン, 3-8

インストールの手順, 3-9, 3-11

インストール前の要件, 2-1 ~ 2-6

Oracle Database Client の削除

Oracle を PATH 環境変数から, 5-8

Oracle Enterprise Manager Java Console, 実行, 4-6

Oracle Net Configuration Assistant

インストール, 4-4

トラブルシューティング, C-3

Oracle Net Services

構成, 4-8

レジストリ エディタのキーの削除, 5-6

Oracle Objects for OLE, 3-3

Oracle Provider for OLE DB, 3-3

Oracle Services for Microsoft Transaction Server, 削
除, 5-7

Oracle Technology Network Japan (OTN-J)

アクセス, 3-7

ソフトウェアのダウンロード, 3-7

Oracle Universal Installer

異なる言語でのコンポーネントの実行, A-7

異なる言語での実行, A-6

コンポーネントの削除, 5-2

使用するリリース, 3-9

ソフトウェアの削除, ガイドライン, 5-3

非対話モードでの実行, A-2

ログ・ファイル, C-2

Oracle Utilities

MS-DOS モードでの設定, B-5

Oracle Windows サービス, 停止, 5-2

Oracle9i の言語および地域のサポート, 4-7

Oracle サービス, 停止, 5-2

Oracle ソフトウェアの再インストール, 3-9

Oracle ディレクトリ, 削除, 5-9

Oracle ベース・ディレクトリ, 作成, 3-2

Oracle ホーム, 複数, 3-3

Oracle レジストリ・キー, 削除, 5-7

OTN-J, 「Oracle Technology Network Japan」を参照

OUI, 「Oracle Universal Installer」を参照

P

PATH 環境変数

Oracle エントリの削除, 5-8

R

RAM

チェック, 2-3

要件, 2-2

S

SQL*Plus

MS-DOS モードでの設定, B-5

sqlnet.ora ファイル, Windows 固有の認証の有効化,
4-2

Symantec pcAnywhere リモート・アクセス・ソフト
ウェア, 3-6

T

TEMP 環境変数, 2-3

TMP 環境変数, 2-3

TNS_ADMIN 環境変数, 4-5

tnsnames.ora ファイル

Instant Client からデータベースへの接続, 4-4

Oracle Net Services の構成, 4-8

V

VNC リモート・アクセス・ソフトウェア, 3-6

W

Windows Multilingual User Interface Pack, 2-4

Windows Telnet サービスのサポート, 2-5

Windows XP, サポートされないコンポーネント, 2-6

Windows 固有の認証, 4-2
Windows ターミナル サービス, サポートされないコンポーネント, 2-6

あ

アプリケーション, 空の接続文字列, 4-5

い

一時ディスク領域
 チェック, 2-3
 要件, 2-2
インストール
 CD-ROM ドライブ, 3-4
 DVD ドライブ, 3-4
 Oracle Technology Network Japan からのソフトウェアのダウンロード, 3-7
 Oracle ベース・ディレクトリ, 3-2
 Oracle ホーム, 複数, 3-3
 インストール・ソフトウェアへのアクセス, 3-4 ~ 3-8
 インストール前の考慮事項, 3-2 ~ 3-3
 エラー, C-2
 ガイドライン, 3-8
 概要, 1-2
 既存の Oracle 製品がインストールされている場合, 3-3
 手順, 3-9 ~ 3-11
 トラブルシューティング, C-1, C-4
 非対話型でのエラー処理, C-4
 非対話モード, A-2
 複数, 3-2
 リモート・アクセス・ソフトウェアを使用したリモート・インストール, 3-6
 リモート・インストール, CD-ROM ドライブ, 3-4
 リモート・インストール, DVD ドライブ, 3-4
 レスポンス・ファイル, C-4
 ログ・ファイル, C-2
インストール後の作業
 Instant Client からデータベースへの接続, 4-3
 Oracle Database Client からデータベースへの接続, 4-2
 Oracle Enterprise Manager Java Console, 実行, 4-6
 Oracle Net Services の構成, 4-8
 Oracle9i の言語および地域のサポート, 4-7
 自動ストレージ管理, Windows 認証, 4-2

推奨, 4-2 ~ 4-6
必須, 4-2
ユーザー・アカウント, 4-6
インストール・ソフトウェア, アクセス, 3-4, 3-8
インストール・タイプ, 1-3
 InstantClient, 1-3
 カスタム, 1-3
 管理者, 1-3
 ランタイム, 1-3
インストールのガイドライン, 3-8
インストール前の考慮事項, 3-2, 3-3

え

エラー
 Configuration Assistant, C-3
 インストール, C-2
 サイレント・モード, C-4
 致命的, C-4
 非対話型インストール, C-4

か

「カスタム」インストール・タイプ, 1-3
空の接続文字列, 4-5
環境変数
 LOCAL, 4-5
 ORA_NLS10, 4-7
 PATH, 5-8
 TEMP と TMP, 2-3
 TNS_ADMIN, 4-5
「管理者」インストール・タイプ, 1-3

き

既存の Oracle インストール, 3-3

け

言語
 Oracle9i をサポートするためのインストール後の手順, 4-7
 異なる言語でのコンポーネントのインストール, A-7
 異なる言語でのコンポーネントの使用, A-7

こ

コンパイラのソフトウェア要件, 2-4

コンポーネント

Oracle Universal Installer を使用して削除, 5-3

異なる言語での使用, A-7

サポートされない

Windows Terminal Server, 2-6

Windows XP, 2-6

さ

サービス

停止, 5-2

サイレント・インストール, 「非対話型インストール」
を参照

削除

Oracle Database Client, 全体の手順, 5-1, 5-9

Oracle Database Client コンポーネントを手動で,
5-5 ～ 5-9

Oracle ディレクトリ, 5-9

コンポーネントを Oracle Universal Installer で, 5-3
「スタート」メニューの Oracle Database Client エン
トリ, 5-8

すべての Oracle レジストリ・キー, 5-7

レジストリ エディタの Oracle Net Services キー,
5-6

レジストリ エディタの Oracle キー, 5-6

レジストリ エディタのキー, 5-6

サポートされないコンポーネント

Windows Terminal Server, 2-6

Windows XP, 2-6

し

自動ストレージ管理 (ASM), 通信する Oracle
Database の構成, 4-2

す

「スタート」メニュー, Oracle Database Client エント
リの削除, 5-8

スワップ領域

チェック, 2-3

要件, 2-2

せ

製品インストール後の作業, Oracle Net Services の構
成, 4-8

そ

ソフトウェア

要件, 2-3

ソフトウェア, 削除, 5-1, 5-9

ち

致命的エラー, C-4

直接アドレッシング, Instant Client からデータベース
への接続, 4-3

て

ディスク領域

チェック, 2-3

要件, 2-2

ディレクトリ, Oracle Database Client の削除, 5-9

データベース

削除, 5-1 ～ 5-9

接続, 4-2

データベースへの接続, 4-2

と

トラブルシューティング, C-1 ～ C-4

インベントリ・ログ・ファイル, C-2

ね

ネットワーク・プロトコルのソフトウェア要件, 2-4

は

ハードウェア要件, 2-2

ハード・ディスク領域

チェック, 2-3

要件, 2-2

バッチ・モード, NLS_LANG パラメータの設定, B-5

ひ

非対話型インストーल
エラー, C-4
「記録」モード, A-4
説明, A-2
手順, A-2 ~ A-6
「レスポンス・ファイル」を参照

ふ

ファイル, Oracle Universal Installer ログ・ファイル,
C-2
物理 RAM
チェック, 2-3
要件, 2-2

へ

ページング・ファイル・サイズ
チェック, 2-3
要件, 2-2

め

メモリー
チェック, 2-3
要件, 2-2

ゆ

ユーザー・アカウント, 4-6

よ

要件
Java Runtime Environment, 2-2
ソフトウェア, 2-3
ハードウェア, 2-2
ハード・ディスク領域, 2-2
要件, Oracle Database Client, 2-1, 2-6

ら

「ランタイム」 インストール・タイプ, 1-3

り

リモート・アクセス・ソフトウェア, 3-6
リモート・インストール
CD-ROM ドライブまたは DVD ドライブ, 3-4
説明, 3-6

れ

レジストリ エディタ
Oracle Net Services キーの削除, 5-6
すべての Oracle キーの削除, 5-7
レスポンス・ファイル
インストール時の指定, A-5
カスタマイズ, A-3
作成, A-4
サンプル, A-3
使用方法, A-2
メディアにある, A-2
「非対話型インストール」も参照

ろ

ログ・ファイル, C-2
インストール・セッションの確認, C-2

